

社団法人 近畿建設協会 支援シンポジウム

“水源地の村”からの提言
「地域をいかす環境教育とは」
報 告 書

平成 20 年 10 月



財団法人 吉野川紀の川源流物語

社団法人 近畿建設協会 支援シンポジウム

“水源地の村”からの提言「地域をいかす環境教育とは」

2008 年 8 月 27 日（水） 橿原市商工経済会館 7 階大ホール

主催 森と水の源流館 （財団法人 吉野川紀の川源流物語）
後援 国土交通省近畿地方整備局 紀の川ダム統合管理事務所
奈良県教育委員会
環境省 きんき環境館（近畿環境パートナーシップオフィス）
吉野川紀の川流域協議会
奈良県川上村
川上村教育委員会

協力 NPO 法人 奈良 21 世紀フォーラム
奈良県「山と森林の月間」協賛イベント
平城遷都 1300 年祭 500 日前マンスリー協賛イベント



プログラムと目次

13 : 30	ごあいさつ	3
13 : 40	基調講演	4
	田中 淳夫 氏（森林ジャーナリスト） 「吉野林業は 学びの “びっくり箱”」	
14 : 40	休憩	
14 : 50	体験校報告 川上村と森林環境教育 橿原市立白樫北小学校 山本 公雄 先生	22
	和歌山市立教育研究所 市川 圭造 先生	28
15 : 30	森林放談	34
	田中淳夫 × 辻谷達雄（森と水の源流館館長）	
16 : 30	おわりに	57

なおこの報告書は後日、音声記録から聴きお越したもののため、講師ならびに発表者に文責はありません。

ごあいさつ

川上村長

財団法人 吉野川紀の川源流物語 理事長

大谷 一二



本日はこれほど多くの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。

川上村には現在、ダムが二つできております。「ダムができて栄えた村はない」と言われますが、それを逆手にとって、川上村はダムが二つもできたけれど、なお一層活性がされているといわれるようにがんばろうということで、「水源地の村づくり」というものに、村民一致協力して取り組んでいるところです。特に三之公原生林「水源地の

森」は 740 ヘクタールにわたって大切に保全し、また林業においても精一杯の努力をして、きれいな水源地の村として、豊かな水を流し続けようと努力しております。

ダムにつきましては、当時の奥田良三奈良県知事が、当時県民が 70 万人であった奈良県を 100 万人大都市にしようとするには、どうしても水が必要だ、まず吉野川から橿原に向けて水を引かなければいけない、農業用水としての確保を行うということをおっしゃられ、そして着々と吉野川分水などの事業を進められ、現在 140 万人近い人口へと発展しています。同様に飲料水の確保も重要であったと思います。

一昨年からは奈良県では、森林環境税を徴収され、それを山のことに使っていただいているということは、ありがたいことだと思います。人工林は放っておいてはよいものではなく、間伐なども必要です。したがって奈良県のこの取り組みは、私たちも真摯にとらえ、がんばらなくてはならないと考えております。

平成 17 年度より『緑の循環』認証会議、いわゆる S G E C というものの認証を受け、施業計画をきっちりと立てて、取り組んでいるところであります。そうしなければ、地球温暖化の面において、環境にもよくない。それをコントロールしていくというのが現在の川上村のやり方です。

本日を機に、これからもぜひ、川上村の林業の取り組み、環境に対する取り組みに対して、みなさまからのご指導・ご鞭撻を賜りますよう、お願いを申し上げます。あわせて、みなさまがたのますますのご健勝をお祈りいたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

基調講演

講師 田中 淳夫 氏 プロフィール

1959 年大阪生まれ。静岡大学農学部林学科卒業。出版社、新聞社勤務を経て、現在フリージャーナリスト。奈良県在住。主に森林、林業、山村問題をテーマに執筆活動を行う。著書に『「森を守れ」が森を殺す』『だれが日本の「森」を殺すのか』（共に洋泉社刊）『田舎で起業！』『森林からのニッポン再生』（共に平凡社新書）など多数。2007 年発刊の『割り箸はもったいない？』（ちくま新書）では、割り箸がどのように生まれ、どのように発展してきたのか、割り箸が林業や森林とどんな関係を築いているのか、そんな疑問に正面から取り組んだ。吉野地域を主なフィールドとして取材を積み重ねており、現場から世界の問題を考えることを心がけている。

【司会】

本日ご講演をいただきます、田中淳夫様は、現在フリーでご活躍の森林ジャーナリストでいらっしゃいます。奈良県生駒市にお住まいで、主に森林、林業、山村問題をテーマに執筆活動を行われています。作品のほんの一部を本日の資料にご紹介しています。田中様は吉野地域を主なフィールドとして取材を積み重ねており、世界的な視点をお持ちになりながら、吉野をはじめとする現場の問題を考えることを心掛けておられます。

吉野林業に、吉野の山に導かれ、常に問題意識をもって、それを表現される田中様は、今回のシンポジウムにふさわしい方ではないかとお願いをしたところ、ご多忙の中、無理をお聞きいただき、本日ここに実現するに至りました。では、お願いいたします。

【田中 淳夫 氏】



いまご紹介に預かりました森林ジャーナリストの田中と申します。ご紹介いただいたとおり、森林や林業や山村問題をテーマに扱わせていただいておりますが、その出発点は、実は 20 年前に川上村を訪れたのが最初でした。ですから、その川上村からこういうかたちで招いていただいて非常に感謝しています。それと、私はいま生駒市に住んでおりますけれども、吉野にはほとんど月に 1、2 度は必ず入るような状況で、その意味でも非常にありがたいと思っております。

今日は「“水源地の村”からの提言」「地域をいかす環境教育とは」というテーマで、さらに演題が「吉野林業は学びの“びっくろ箱”」と・・・、私が言うのもなんですが、何が何だかよくわからないようなタイトルがいっぱい並んでいます。本日は林業関係者の方もいらっしゃるということですが、学校・教育関係者の方も多いと聞いておりますので、そういう方々向きにも、環境教育にもふれながらお話しさせていただこうと思っています。

奈良県では、森林環境教育指導員というのを養成しているようでして、他人事のように言いましたけれども、実は私は、この奈良県の森林環境教育指導員の資格を持っています。去年、ちゃんと研修を受けて取らせていただきました。そのときは奈良県の方々に非常にお世話になったと思っています。ですから今日はこの森林環境教育指導員の資格で話そうかなと思っていますが、といって最初から「環境教育とはなんぞや」とか、「吉野林業とは何か」ということでは堅苦しくなりますので、ちょっと柔らかめにといい、奈良県の観光の話からさせていただこうと思っています。私は、全国各地に呼ばれて、森の話をするときには、必ずはじめに奈良県の観光案内をすることにしておりまして、最近「せんとかん」のキャラクターも使わせていただいております。さすがに今日はそこまでは行きませんが・・・。

実は、日本列島から“木がなくなっていた”時代がありました。

まず、この写真は何か知らない方はいないと思います。東大寺の大仏殿です。世界最大級の木造建築物の一つと伝えられております。この大仏殿は江戸時代に建てられた 3 代目だということはお存じではないかなと思います。平城京ができたのが西暦 710 年ということですので、2 年後に控えている遷都 1300 年祭というのは、そこから来るわけですが、東大寺が建立されたのは 752 年となっています。

初代の仏殿と大仏は、平家に焼き討ちされるわけです。そして建て直されたのが重源

上人だということですが、これが1196年です。ところが、この2代目の大仏と大仏殿も、戦国時代に松永弾正久秀によって焼き討ちされるということになります。実は、この松永弾正というのは私の母方の祖先でございまして、そういう意味では、私は焼き討ちした子孫かなとか思っているのです。これが復活するのが、公慶上人が再建したのが江戸時代、1709年ということになっています。つまり来年度がちょうど3代目建立から300年祭になるのかなと思っているのですが、そちらはあまり話題にならないようです。ということで、現在の大仏と大仏殿というものは3代目であるということをもまず思い出していただきたいと思います。

では、初代の天平時代の大仏殿と2代目、鎌倉時代、それと今の江戸時代に造られた大仏殿とは、どこか違いがあるのかということはお存じでしょうか。実はこの大仏殿の中に入りますと、その裏手のほうに、三つの模型がありまして、その写真を使わせていただきますが、この写真が初代の天平時代の大仏殿です。これが南大門になりますので、大仏殿は、その後ろの部分です。そして、こちらの両側に七重塔が建っています。これは推定で高さ100m近くあったろうと言われていています。今から見ても、相当巨大な塔が当時は建っていたのです。残念ながら七重塔は再建されずに、今は存在しませんけれども、この部分が大仏殿になっていることは、少し覚えておいてもらいたいです。そして2代目がこの写真です。これが鎌倉時代の大仏殿の模型です。さらに次、この写真が江戸時代に再建された現在の大仏殿です。

初代と2代目というのは、だいたい形が一緒です。若干、大仏様という中国様式が入っているのですが、ほぼ一緒と言ってよいでしょう。しかし2代目と3代目は、かなり違います。わかりますか。一目でわかるとおり、幅が狭くなっています。2代目の幅は86.1mあったそうですけれども、現在のものは57mです。形も長方形から正方形に変わっています。柱の数も当然変わります。天平の大仏殿は84本の柱があったのですが、鎌倉時代のものは92本です。これは、天平時代のものは建ててからすぐに傾きだしたということで、それはまずいということで柱を92本に増やしています。江戸時代に造った現在の大仏殿は60本です。数がぐんと減りました。しかも、その柱は細くなっているのです。

この写真が今の大仏殿の柱です。ビスを打っていますね。鋸といいますか。そして鉄輪をはめています。これは要するに無垢の柱ではないのです。寄せ木です。今風に言えば集成材です。しかも、それまで奥の柱は全部ヒノキだったのですが、実はこの集成で使っている木材というのは、スギとかマツとか、いろいろ混在しています。つ



まり、建物が小さくなって、柱も少なく細くして、しかも寄せ木になっている。これが現在の大仏殿ということです。時代が上がっていけば、当然、輸送技術は増すし、建築技術も上がるのだから、大きくなってくるのだったらわかるのですが、逆に小さくなってしまったのはなぜか、ということです。これは実は単純な話で、木材がなかったのです。江戸時代も、当然、最初の計画では、鎌倉時代と同じようなものを再建しようとしていたのです。そのための設計図もあったのですが、造っている最中にお金がなくなり、江戸幕府、徳川家光だったのでしょうか、その時代ですが、お金は出してくれたのですけれども、それでもだめだったのです。なぜかといいますと、木がなかったのです。

記録では、宮崎県まで探しに行って、そこの大木を見つけてはこの奈良まで引っ張ってきたという記録はあるのですけれども、それでも足りずに、どうしても造れなかったのです。それで、とうとう柱を寄せ木にしてしまったのです。1本1本が違って、この下に穴が開いています。くぐるのは有名ですが、私がくぐったとき、途中でお腹がつかえてやめたのですが、くぐる途中に見たら、ここに寄せ木の部分の中心部が見えます。ですから、みな違う木だとわかります。ぜひ一度試していただくといいと思います。

このように、実は日本列島から木がなくなっていたということが、この大仏殿から感じていただけるのではないかなと思います。



この写真は、奈良公園の鹿です。奈良公園にいったい鹿は何匹ぐらいいるかご存じでしょうか。奈良公園は、だいたい東西南北に10km四方ぐらいなのですが、そこにいるのは、毎年、奈良の鹿愛護会がチェックしておりますが、大体1300頭前後です。これは非常な高密度なのです。「動物園じゃないんだから」というほど高密度に鹿が住んでいるわけです。しかも言うまでもありませんが、この鹿は野生

です。決して人が飼っているわけではありません。多少の世話はして、鹿せんべいもあげていますが、それはおやつぐらいにしかありません。それなのに、なぜこんなに高密度に、たくさんの鹿が狭いところに住んでいるのかという疑問を持っていただきたいと思うのです。

それは一言で言えば、人が森を破壊したからです。もしあの10km四方が全部森林だった場合、せいぜい住めても300頭ぐらいだと言われています。自然界というのはそんなものなのです。300頭を越えては食べる物が無いという状況です。ところが、奈良公園の辺りというのは、奈良の都ができて、どんどん木が伐採されて、神社仏閣が建ちました。

今もちろん、東大寺とか興福寺とか、いろいろなお寺が建っていますが、それらは木を伐って、そこにお堂を建てるわけですが、その境内とかには草が生えるわけです。いわゆる草原のような状況になります。今の飛火野なんかは草原としてありますけれども、あちこち草原状態にしてきたわけです。つまり、そこに草が生えるということは、鹿も餌がでるということで、鹿は1300頭食べていけるだけの餌があったということです。

ただ、これが全部草原であつたらいいのかといいますと、そうではなくて、鹿というのは、実は、夜は森の中で寝るのです。ですから、日中は外を、町の中を歩いたり、飛火野を歩いて草を食べていますけれども、夜になると森の中に入ります。実は、その森がないと棲めないのです。この奈良公園には、春日大社の春日の杜があります。これがちょうどねぐらになりますから、鹿としては非常に棲みやすくなった。それと人間が保護したと言われています。保護したというのは餌をあげたという意味ではなくて、捕って食わなかったということですが、神のお使いということで保護したことで、数が増えて1300頭にもなったということです。

ある意味、奈良というのは、日本の森林破壊の原点である！？

ここで大仏殿や奈良の鹿を見せたのはなぜかといいますと、人と森との歴史をちょっと振り返ろうという場合、やはりまず考えなくてはいけないのは、人が森にどんな影響を与えてきたかということです。もう少し具体的に言いますと、いかに森林を破壊してきたかということになるのではないかなと思います。

例えば縄文時代、もちろん人口も少なかったのですが、ほとんど日本列島は森に覆われていたと思っていたのですが、最近の研究によると、そうでもなかったらしいのです。どうも森林の1割ぐらいいは、何らかのかたちで人の手が加わっていたらしいです。主に焼き畑です。焼き畑農業が広まっております、それでけっこう伐採も進んでいたようです。

それから、弥生時代になりますと、当然、水田農耕が始まって田畑も作ります。これは常作ですから、焼き畑のように放っておいたらまた森に戻るということはなく、いったん伐ったところはすべて延々と森に戻ることなく農地になっています。それでもどんどん森が減っていくわけです。そこに人が住めば、燃料として薪を取ります。他にもいろいろ道具類をつくります。例えば、鉄とか青銅とか金属製品を使おうと思えば精錬を行いますから、たたら製鉄のように、薪を使ってエネルギーとして精錬します。他にも縄文土器も弥生式土器も須恵器も土師器も、みな焼くときには薪を使います。それもどんどん山の木を切って使うということになります。

そうしますと、人が多く住むところほど森がなくなっているわけです。当然、奈良の都のように、奈良の都の前に飛鳥の宮でもいいのですけれども、そこに人が集まって大和朝廷が広がっていくと、当然人口が増えるわけですから、そこで建物を建てるために木を伐る。食事をするだけの煮炊きにも木を使う。他の道具類をつくるにしても何にしても、すべてエネルギー源は木材から得ているわけですから、どんどんどんどん森林が減っていく

わけです。

そして飛鳥の宮から藤原京、平城京と来ると、平城京なんかは約70年続いたわけですから、そのあいだ延々と木を伐り続けたわけです。そうすると奈良の都の周辺の森はどんどんなくなっていくます。はげ山になっていきます。それが若草山かどうかは知りませんが、今は若草山の部分だけですけれども、その当時、たぶんあのような状態が周り全部に広がったのではないかと思います。特に産業用としても木材はかなり使いましたので減ったはずですよ。それから、代わりに馬とか牛とかを飼えば、それを放牧することによってまた草を食べるということで、木が生えてこなくなるということもあります。

このように時代が進んで都ができれば、森林破壊が進むわけです。「ある意味、奈良というのは日本の森林破壊の原点である」なんて言ったら怒られるかもしれませんが、けっこう象徴的に現れているところではないかなと思います。ただ、これは奈良だけではないのです。

日本の山が常に緑であったというのは幻想で、はげ山時代が長く続いたということです。

ちょっと奈良から離れます。これは有名な歌川広重、安藤広重の東海道五十三次の浮世絵です。小田原の絵です。酒匂川を渡るところです。今の神奈川県です。見てほしいのは背景の山です。ほとんど木を描いていないでしょう。

次は、今の静岡県原です。これも富士山が描かれていますけれども、背景の山にほとんど木がないです。

次は、二川。今で言うと愛知県の豊橋の辺です。これも全然ないです。ここにあるのはマツですけれども、ほとんど木がないです。マツというのは、山が荒れて最後に生えてくるのです。もう一番やせたところでも生えるのがマツですから、マツが生えているというのは、もうこの山は非常に荒れている証拠です。やせているのです。

これだけを見ても、江戸時代の山が非常に荒れていて木がなかったということがちょっとわかるのではないかなと思います。安藤広重が本当に現場を見て描いたかどうかということは別の問題なんですけれども、ただ当時の景色としては、これは珍しくなかったのです。これは、たまたま今日は安藤広重を持ってきましたけれども、他のいろいろな絵師の描いた屏風絵とかを見ても全部そうです。北上山地の絵でさえも、実ははげ山だったりします。つまり、この時代というのは、日本の山というのははげ山が多かったのです。決して緑豊かな山ではなかった。まだ半信半疑な人がいるようですから、まだ写真を用意しています。

これは写真ですから、明治の時代に入っていますけれども、琵琶湖疎水の工事中の写真です。今で言うと京都市の東山ですね。次も疎水の工事の写真ですが、見てほしいのはこのバックです。はげ山でしょう。さらに次、これは明治後期、大正時代になっていますが、実はこれは東京都の立川なのです。多摩川の上流部です。ここに集落があるのですが、こ

こを見てください。見事にはげ山です。東京都というと都会に近いように思いますが、立川というのは今でも電車で乗れば都心から1時間半はかかるのでしょうか。かなり遠いところです。大阪辺りから奈良を突き抜けてしまうようなほど遠いのですが、そこでもこんなに山がはげています。つまり、日本の山が常に緑であったというのは幻想でして、非常にはげ山時代が長く続いたということです。

「江戸時代というのは非常にエコロジカルな時代だった」というような意見があります。ごく一部の江戸の町のリサイクルの部分だけを取り上げたらそうかもしれませんが、日本全国の自然環境という面から言うと、かなり荒れていました。決して豊かな森はなかったのです。日本人というのはどうも「昔から森がいっぱいあって、それが最近になって開発が進んで減ってきた」というイメージでとらえている方も多いのですが、残念ながらそうとは言えないのです。むしろ縄文以降ずっと、日本の有史前といいますか、人類が、日本人が住んでからこの方、森はずっと減り続けたのです。飛鳥時代も奈良時代も平安時代も鎌倉もずっと減り続けて、どうやら一番減った、どん底になった時期というのは中世からです。特に戦国時代です。

戦国時代というのは各地に戦国大名が割拠したわけですが、そうしますと、各地で開発が進んだのです。自国を豊かにしようと。そういう意味では、非常に経済的には活発な時期だったのですけれども、同時に山が荒れる時期でもあったのです。当時は、当然のことながら、山の木というのは自然に生えた木を切るというだけの林業ですから、どうやら戦国時代末期には、もう日本国中の山が丸裸になっています。吉野もご多分に漏れず、どうやらはげ山になったようです。

吉野というのは、「森づくり」という意味では、先駆的な存在であり、 今も森が回復しているということは、成功したということです。

吉野山のいろいろな神社仏閣は、全部、山の木を伐ってつくられているわけですから、はっきり記録は残っていませんが、どうやら中世以前から山は荒れだして、秀吉の伏見城や大阪城をつくるのにも使われたようです。どうやって運んだかとか、確実に運んだという記録はないので正確には言えませんが、どうやら当時から吉野山の木というのは太くていいということで思われていたようで、伐られたのは間違いありません。ただしその当時の木というのは、今で言う、いわゆる吉野杉ではありませんで、主にモミとかケヤキなどの広葉樹が多かったようです。今でもトガだとかモミだとか、原生林の部分には残って生えてきたものです。トガサワラもありますね。それらが生えていますが、それがはげ山になってしまった。これは大変だ、何とかしなくてはいけないということで、初めて木を植えて育てるといふ、造林というものが始まります。これは吉野がどうやら日本で最初のように、神のよりしろとして木を植えるというのはありましたけれども、森をつくるための植林というのは、記録に残るかぎり、どうやら吉野が日本で最古のようです。日本で最

古どころか、はっきりとは言えませんが、世界でも最古ではないかと言われています。

記録に残っているのは川上村、当時の川上郷。西暦で言うと1501年頃から植林が始まったようです。つまり、吉野というのはこの「森づくり」という意味では先駆的な存在であり、しかも今も森が回復しているということは成功したということです。日本で吉野が最も早く大掛かりな植林をしたということを、ひとつ記憶にとどめてもらいたいです。

実際にどこにどんな木を植えたかというのは証拠がなくて、はたして1501年の記録が正しいのかどうか疑問もあるのでありますが、少なくとも日本一古いのは間違いありません。当時は焼き畑が広がっていましたので、はげ山のところは焼き畑でしたので、最初の1、2年はアワとかヒエとかソバを植えています。それを収穫した頃に木の苗を植えるということが広まっていたようです。そしてその畑を放棄した後は、植えた木の苗が20年もしたら森をつくる。そうしたら、また伐採してそこを焼き畑にする。そういう焼き畑林業というものが広まったのです。そのうちにだんだん「焼き畑をして農作物をつくるよりも、木を伐ってそれを売ったほうがお金になる」ということに気がつきまして、「では、木だけを植えよう」というふうにどんどん木を植えていきます。それがどうやら吉野林業のスタートのようです。



この写真の木は、樹齢が約390年から400年あります。川上村にある「歴史の証人」と名付けられた木なのですけれども、いま十何本か残っているのです。スギの木で400年というと、そんなに古いほうに入りません。屋久杉といたら1000年、2000年の古いものがあるのですけれども。ただここで重要なのは、この「歴史の証人」は、人が植えた木ということです。記録に残っているかぎり、これほど古い植林による木というのはこの川上村と、あと鳥取の智頭町に若干ありますが、慶長杉といって慶長年代に植えた杉があり、そこぐらいのものです。日本最古の人工的につくった森の木。それがまだ残っているわけです。

焼き畑に木の苗を植えるというと、やはり農業ですので、たくさん植えたくなる。しかも、この当時、自分で植えるのではなくて、雇われて植えるとなったら、たくさん木の苗を植えたほうがお金になります。「1本植えていくら」という値段を付けていますから。そうすると、どんどんどんどん狭いところに植えていきます。とうとう吉野というのは狭いところに密植するという癖がついてしまいまして、これは今の山でたまたま見かけた所の写真ですけれども、1haに1万本以上植えるようになってしまったのです。

この写真は、植えてから5年から10年というところでしょうか。後ろのほうがちよっ

と大きいです。手前のほうのやつは背が低いです。ところが、この木と木の間が1 mないのです。これだけびっしりと植えたわけです。これはかなり手間をかけて、草も刈り、枝も落としていますけれども、普通、これだけみっちり植えたら育たないです。林業関係者もおられますから、私が言うのも釈迦に説法なのですけども、とりあえず植えたわけです。ところが、このままでは当然枯れてしまう。どうするか。これはやはり間伐するのです。

「吉野林業は、間伐にあり」と、私は思っています。

そういう歴史を積んできたわけです。

この写真で何年ぐらいでしょうか。せいぜい植えて20～30年かなと思います。ここで注目してほしいのは、ここに小さな切り株がいっぱいあります。間伐はしているのです。枝打ちもしているようで、かなりきれいな森ですけども、それでもこれは相当密でしょう。ここまで1 mが、ちょっと広げても 1.5 mか、そんな感じです。非常に密です。そのまま、またしばらくして木が太くなると、また育たなくなってしまうのです。ですから、また間伐をします。それを繰り返していくと、最後にはこういうものになります。

この写真で150年から200年ぐらいでしょうか。もう直径が1 mぐらいあります。ここまで来ると、1 ha にせいぜい100本ぐらいしか残っていません。1万本植えて、ここまで育つのが100本です。では残りの9900本は捨てたのかということになってしまっているのですが、そんなことをしたら、さすがの吉野林業でも食っていけません。吉野林業というのは間伐材を捨てなかったということです。実は過去形なのです、残念なことに。今は捨てているようなところがあります。1万本植えても徐々に抜き切りをして、細いうちから間伐材が出るわけですが、直径2～3 cm の頃からそれを全部利用したわけです。2～3 cm でも、銭丸太といいます、こんな細い丸太を使ってちゃんと商品を作りました。徐々に変えていきました。そして一番有名なのは稲刈りのあとに使われました、こういう細い丸太もちゃんと利用しているということです。他にも建築現場の足場丸太とか、もう少し太くなって直径10 cm ぐらいまで行けば磨丸太にできます。磨丸太になったら値段がポーンと跳ね上がります。高級材素材です。そういうふうに、細い木は細いなりにいろいろ利用する方法を考えて商品をつくったのです。当然、お金に換えたわけです。ですから、150年待って100本だけ売って儲けるといって、そういう林業ではなかったのです。もう植えてから10年、15年ぐらいから商品がどんどんとれていくのです。そういう林業をやっていました。

しかも太い木になっても、丸太から角材を製材します。丸いものから角を取ると、当然、その周囲にこの弓形の材が出ます。これを背板と呼んでいますけれども、これを集めているのです。日本の他の林業地に行きますと、当然、製材をしていれば背板は出るのが、まあ利用していません。ほとんど燃やして捨てています。ところが吉野の場合は、これを集めるというのは、集める業者が専門にいて、背板を使う専門業者がいるのです。と

いうのは、ちゃんと商品になったわけです。それがいろいろ商品になりますけれども、一番良いのは割り箸づくりです。

つまり、細い間伐材でも使えれば、太い木から製材した際の背板も使う。それが吉野林業なのです。ある意味こういう廃物利用が吉野林業の一番の特徴であったわけで、決して切り捨てるようなもったいないことはしなかったということです。それを、今の林業と比べて、非常に情けないなと思うところなのですから、吉野林業はこの間伐にありと私は思っています。そういう歴史を積んできたわけです。

この写真もよい森でしょう。非常にきれいな森です。これは木曽ヒノキです。樹齢は300年を超えています。先ほど見せた吉野スギの150年ものとよく似た感じの景色なのですから、実は全国であまりにも伐採が進んではげ山だらけになったので、森づくりを始めてまいりました。この木曽の場合、一度ははげ山になってしまったのですが、何とかしなくてはいけないと当時の尾張藩がやったのは、「ヒノキ一本首一つ」という言葉で言われますが、要するに木を伐ったら首が飛ぶ、殺されてしまうというほど厳しい罰則にしました。つまり伐採禁止令を出したのです。ですから、今の木曽ヒノキが復活したのです。

面白いのは、あまり植えていないのです。あくまで木を伐らないようにしただけなのです。あと、生えてくるのは天然更新といえますか、放ったらかしにして勝手に生えるのを待っていたわけです。天然更新という言い方はするのですけれども、結局1本300年経つといっても、これは自然に生えた木なのです。そういうところがちょっと吉野とは違うところです。吉野は積極的に植えてきたわけです。



川上村は、日本の山村のモデルケース。

むしろ「川上村になりたい」と思ったのです。

全国から、吉野詣が起こったというような時代があったわけです。

こういう状況で明治を迎えて、明治時代の森林率というのは大体45%ぐらいではないかなと私は計算しているのですが、少しずつ森づくりはしたといっても、やはりあまり森林が多いわけではありません。当然、明治時代の初年あたりは、もう毎年のように災害が起こって、洪水が起こって、土砂崩れが起きています。ここで明治政府も「何とかしなくてははいけない」と、注目し、そこで考えたのは吉野林業です。

明治になって経済発展しているわけですが、当時は木材不足でしたから、非常に値段が上がっていました。ですから、何とかして木材を生産したいということで「吉野に見習え」という運動になりました。吉野式によって、もっと山に木をつくろうと。その立

役者がこの写真、知っている人は知っている、川上村大滝に建っている銅像、土倉庄三郎です。明治時代の山林王と呼ばれています。

彼のことをしゃべりだしたら、まあ2〜3時間いただきたいと思っているのですけれども、簡単に言えば、この山林から得られたお金で、例えば自由民権運動を後押しします。「自由民権運動の台所は大和にあり」と言われまして、実は、自由民権運動を行うにあたっての資金はかなり彼から出ています。板垣退助も川上村を訪れるほどです。明治の元老は全部、土倉さんのお世話になっていると言われるほどでして、それほどの財力を誇ったのは実は吉野林業だけなのです。

これは吉野川ですけれども、木を筏にして川で運んだ、流したと言われているのですが、初めからこんな川ではないのです。もっと岩がごつごつあったところを岩を削って川を広げたのは、実は土倉さんがやったわけです。今は自然だと思っているところが、実はけっこう土倉さんがつくったところが多いです。例えば、吉野山の桜が切られてしまいそうになったから買い取ったとか、同志社大学とか日本女子大の設立に協力したとか、鉄道会社を作ったり、銀行設立にかかわっているとか、他にもいろいろありますけれども、そういうことをやっているわけです。

この方は吉野林業を全国に広める旗振り役だったのです。各地で講演もしましたし、活躍されて、全国に吉野式の林業地がかなり増えています。今それが残っているかどうかは別の問題なのですが、当時はこうして吉野式が広まっていたということになります。つまり当時の吉野、特に川上村というのは、日本の山村のモデルケースだったのです。むしろ「川上村になりたい」と思ったのです。全国から吉野詣が起こったというような時代があったわけです。

日本は世界に冠たる森林大国、林業大国と言ってもいいと思っています。 問題は、「育てた木を切って使う」というほうで苦しんでいます。

その後、戦争が起きて木を伐ってしまったことはありましたけれども、幸いにして吉野では乱伐はほとんどされませんでしたので、今も山に木が残っているわけです。ただ全国的に非常に山が荒れたものですから、戦後の昭和30年代、40年代に造林ブームになっています。ブームというか、国民運動として行われました。緑の羽根募金とかされたわけですが、そのおかげで今の森林率が大体67%です。明治時代の45%から見れば、20%以上増えているわけです。ですから日本が世界に冠たる森林大国になったのは、実はこのおかげなのです。

この写真は生駒山です。私の住んでいるのはこの辺りなのですけれども、ここが山上です。これが生駒山上の遊園地です。これはケーブルカーです。1946年に米軍の撮った写真です。はっきり言って、緑があまりないでしょう。この辺りは棚田ですけれども、もう山じゅうが伐り尽くされていました。

そしてこれが現在です。これは google で見た最近のものです。緑がいっぱいでしょう。

生駒山もほんの30～40年、40～50年前は、まだはげ山になっていました。それが復活して、いま緑に覆われています。ここが山上ですね。これは信貴生駒スカイラインですね。このように見ますと、いかに日本の森は戦後になって復活したかということが感じてもらえるのではないかなと思います。

よく「日本の林業は失敗した。だから、今は林業が不振になっている」みたいに言うのですけれども、この「森をつくる」という面言えば、もう素晴らしく大成功したわけです。日本は世界に冠たる森林大国、林業大国と言ってもいいのではないかなと思っています。問題は林業ではなく、その先の「育てた木を切って使う」という林産業のほうはどうも、苦しんでいる部分があるのですけれども、ここのところをちょっと感じていただければなと思っています。ですから、日本の森というのは、人がつくった、日本人がつくった森がほとんどだということになります。

人の手の加え方によっていろいろ変わる。

これがある意味、人工林の値打ちであって、実に面白いところと思います。

「やはり環境教育といたら、豊かな自然のあるところがいいでしょう」「それなら原生林なんかがいいんじゃないか」とか「身近な雑木林がいいんじゃないか」と言う方がいらっやいます。では、「環境教育に人工林は使えるのか」「人工林はちょっと、どうもいまいち使いづらいな」ということになります。

この写真は大台ヶ原の原生林です。まさに原生林なのですけれども、コケむしておりまして暗いです。この写真は生駒山の雑木林です。木が細いし、高くないから明るいです。何が豊かかは難しいのですけれども、実は豊かな自然というのをとりあえず生物多様性といえますか、たくさんの生物がいる自然というのはどちらかというと、それはこの雑木林なのです。なぜならば、明るければ下に草が生える。草が生えればそこに昆虫も増える。昆虫がいれば鳥も獣も現れる。森全体で言えば、原生林は、実はかなり生物の数は少ないのです。雑木林のほうのはるかに多いです。そういうことを考えますと、雑木林が豊かな自然ということになります。ホタルなんかも、雑木林にはいても原生林にはいませんよね。

この写真は海上の森、愛知万博をやったところです。雑木林の美しいところが有名なのですが、実は30年前はここは丸裸でした。瀬戸物の産地ですので、陶土を取るために、粘土を取るために、山を全部はいでしまったのです。そのあとに復活した森がこの海上の森なのです。これもいま豊かな自然になっているというのは、この雑木林だからと言ってもいいと思います。

では、人工林は豊かではないのでしょうか。ちょっと紹介したいのがこれです。これは三重県の尾鷲にあります速水林業という会社なのですが、そこの森です。知っている人は知っている非常に有名な森です。日本のオピニオンリーダーになる林業家の森ですけれども。ここの森はヒノキ林なのですが、よく見ると下はシダが生えて、その間にいっぱい広葉樹が生えています。これは季節によっては花が咲いて、春はサクラの花が咲いて、秋は

紅葉して赤くなります。非常に美しい森です。そして、もちろん生えているのは尾鷲ヒノキですから、それも高級材です。

この森の植物の数を調べた結果があるのですけれども、同じ速水林業内に天然林がありまして、そこを調べると185種類の植物がありました。「では、この人工林はどうだろう。天然林よりは劣るだろうな」と思って調べたら、243種類ありました。つまり人工林のほうが自然は豊かだったのです。天然林というのは、先ほど見せた雑木林ではなくて、この原生林状態になっていますから、暗くてあまりない。ところが、人工林というのは世話をすればするほどちゃんと生えてきて、下草生えがありますから、非常に生物が豊かだということになります。こちらは調査はしていないみたいですが、ぜひ吉野の森も調べていただきたいです。もしかしたら吉野杉のほうがもっと生物が多様かもしれません。あの150年の森を生かしてあげたら、負けないだけのものがあるのではないかなと思います。「じゃあ、人工林だって豊かじゃないか。これは素晴らしい」と、そう簡単には言えないのは、人工林というのは言葉どおり人がつくった森ですから、人がどのようにつくるかによって全く変わってしまうわけです。手の加え方によって変わってしまいます。

例えばこの写真ですが、都祁村の一角です。これはヒノキ林でしょうけれども、もう土壌がなくなって、岩がごつごつして、木も全然成長しないのです。世話をしないと、こういう状態になる人工林もあるということです。そこから少し向きを変えて撮った写真がこんな感じです。10mも離れていません。持ち主が違うのですね。間に道があって、こちらの写真とこちらの写真です。こちらの森は非常に手入れが素晴らしい。これが隣り合わせにあるのです。つまり人工林というのはどうにでもなるのです。人の手の加え方によっていろいろ変わります。これがある意味人工林の値打ちであって、実に面白いところではないかなと思います。

一つだけ勘違いしてもらいたくないのですけれども、今の言い方ですと「どうも原生林の自然は大したことがない」と思われてしまうとまずいので、ちょっとだけ付け加えておきます。実はそういう言い方をするとまずいのは、単にその生物の種類だけでは計れない部分があるわけです。

例えば原生林に100種類の昆虫がいたとします。そして雑木林を調べたら120種類いたとします。普通に考えると、「雑木林には原生林にいた100種類の昆虫に、プラスあと20種類の別の昆虫がいるんだな」と思いがちなのですが、そうではないです。実は、雑木林の120種類というのは、ほとんど原生林の100種類とは重なっていません。ほんの数割はいるかもしれませんが、1割、2割は重なっても、ほとんど別の種類が棲んでいます。原生林の環境に適応した昆虫が棲むのであって、雑木林と重なっていないのです。では原生林がなくても、雑木林があれば豊かな自然が守れるかといいますと、そうではありません。やはり原生林には原生林の自然がある。雑木林には雑木林に適応した生物が澄んでいる。この点だけは間違わないように思っただけならばと思います。そういう意味では、原生林保護もしっかりしなくてははいけないし、雑木林も守ってほしい。

雑木林を守るというのは、放っておいたら守れません。どんどん木が育つと太くなって、原生林みたいになってしまいますから。常に手を入れて、太くなったら伐って、また新しい木を植えてという状況をつくるのが雑木林を守ることです。繰り返しますと、人工林を良くするというのは、やはり人の手を加えて、こういう森にしていかななくてはけません。

自然は人間がいなくても 生きていく力が存在しているのか、何も困らないのか？

「人間は自然がなくては困るけれども、自然は人がいなくても困らない」。よくそういう言葉がありますね。本にも出てくるし、テレビなどで文化人がしゃべっているのを聞くのですが、はたしてこれはそうなのかと私は疑問に思っています。

確かに人間は、自然がないと生きていけないです。例えば、水も酸素も必要ですし、食べ物も調達しなくてはけません。これらは自然が生み出すものです。これは、そういう生理的なものでなくて、すべてが人工環境の中ではたして人間は生きていけるのか、精神的にもつのかという気がします。やはり何かすべて自然を排除した空間にいと、頭がおかしくなるのではないかなと思います。ですから、室内にも観葉植物を置いたり、植木鉢によって何か植わったり、水槽に金魚を、熱帯魚を飼うというのも、少しでもそういう自然の部分の置かなければ、やはり人間の、精神的にもたない部分があるのではないかなと思います。

「人間は自然がないと生きていけない」というのは、これはわかりやすいです。では、「自然は人間がいなくても生きていく力が存在しているのか、何も困らないのか」ということになると、さあ、どうでしょう。自然といっても幅が広いので、それは砂漠のような自然もあれば、月とか火星のように一切の生物がいなくなるのも自然ですが、それは特殊ですけれども、ごく普通に考えて、そこに生物がいる自然を思い描いた場合、はたして自然は人間が手を加えなくても困らないのでしょうか。

すでに紹介したとおり、例えば雑木林に棲んでいる昆虫は、その雑木林がなくなると住むところなくなるのです。原生林になったら棲めません。環境が違いすぎますから。今の雑木林に適応した昆虫なり、あるいは草花があったりします。つまり、雑木林がなくなると、そういうものは滅んでいく可能性があります。それを、雑木林を雑木林として残そうと思うと、やはり人がある程度手を加えなければならないというのが条件なのです。人工林も同じですね。こういう豊かな人工林でしたら、ここにいろいろな草が生えたりもしています。こういう木も生えていますし、たぶん昆虫もいっぱいいるでしょうけれども、放っておいて荒れてくると棲めなくなるのです。そういう意味では、やはり人が手を加えることによって守られている自然もあるのではないかなと言ってもよいと思います。

そして、日本の森というのは、実はほとんど人の手が入っているのです。たぶん人工林は、日本の森のうちの4割が人工林です。そして、残り3割ぐらいが雑木林と言われています。3割から4割、ちょっとはっきりした統計はないのですが、里山と呼ばれる

ところはこれぐらいなのですが、これで7割です。では、残りの3割も、確かに手は加えていないのですけれども、かつて伐採した跡というのははだいたいあります。本当に人の手が加わっていない原生林というのは、たぶんコンマ以下です。0コンマ何パーセントしか残っていません。そう考えますと、何らかのかたちで人が手を加えた森が今の日本の森の大多数なわけですから、もし今この日本列島から人が一切いなくなって100年もたったら、滅んでいく昆虫や動物はかなりいるのではないかなと思います。

よく「オオタカが出たら、自然を守るために木を切ってはいけない」とか、オオタカ、クマタカとか言いますが、彼らが餌を捕っているのはどこで捕っているかといえますと、実は林道で捕っているのです。林道というのはそこだけ木がないわけですから、そうすると、上から飛んでいくと、そこにネズミとかが走っているのが見えやすいですから、そこで急降下して捕っているのです。これが一面全部森だとしたら、どこに獲物がいるかわからないという状況になって、餌が捕れなくなってしまいます。つまり、野生のこういう猛禽類でさえもそういうことが起こるのです。そう考えますと、「自然もまた人に依存している」と、ちょっとおこがましいですが、そういう言い方をしてもいいのではないかなと思います。

そして人間も当然のことながら、その生まれた自然によって依存しています。もうちょっとわかりやすく言えば、自然の中に人間も、人為というか、人の手も加わっていることも含まれているのではないかなと言ってもよいのではないかなと思います。人の活動による自然の改変といいますか、変化というのも含めて、自然の生態系というのがいま生まれていると言っていると思います。

人も自然が必要、自然も人が必要。お互いに相手を必要としている。 そういう関係を伝えてほしいと私は思っています。

生態系というと、動植物間の関係の他に、気候の問題とか、もちろん雨風とか温暖差とかいうものもありますけれども、同じように「人が手を加えて何年に1回、木を伐採する」というのも、そういう生態系の一部と考えてもいいのではないかなと思います。私は、こういう人と森林の関係といいますか、もうちょっと格好よく言えば「共生」というか、お互いが依存し合う関係というものこそが非常に大切で、それを教えることが環境教育ではないかなと考えています。

環境教育というと「自然の素晴らしさを教えることだ」と言う方がいらっしゃいますが、それはもちろんそのとおりなのですが、「自然は素晴らしい」、そう言って原生林のような自然を見せつけていくと、「その自然を破壊する木を切る行為はけしからん」と、そういう発想になりがちだと思います。そこに人間はいないですね。人の姿が見えません。まったく人の触れない自然だけを素晴らしいと言うのが、はたして本当に意味での教育になるのだろうかと思っています。人も自然が必要ですし、自然も人が必要だと。そういう、お互いに相手を必要としている、そういう関係を伝えてほしいと私は思っています。

**人の営みというのは、なにも目の前のものだけではなくて、
連綿と続く人々の歴史と伝統の部分も含むのではないかなと思っています。
それが加わって初めて、感動を呼ぶ自然の紹介になると思います。**

その教育地域というのは、なにもアマゾンの自然を持ち出してしゃべるのではなくて、やはり地域の自然を持ち出して、説明して、目の前にあって初めて伝わるのではないかなと思います。そして自然の営みを伝えるのはもちろん美しいことなのですが、それだけだと、言葉は悪いですが、飽きてしまうといいますか、では、すべてがみな納得して喜んでくれるかといいますと、そうではないという気がします。

子どもたちに「自然は素晴らしいんだよ」と言って、「虫がここを歩いているだろう」と言っても、はたしてすべての子どもが興味を示すかといいますと、「虫嫌いの子どももいるで」というふうには私は思うのですが、単純にそういう自然さえ伝えれば皆が喜ぶとはかぎらないかなと思っています。むしろそこに、人の営みというのも興味を引く一つのネタになるのではないかな。人の営みというのはなにも目の前のものだけではなくて、連綿と続く人々の歴史と伝統の部分も含むのではないかなと思っています。そういうものが加わってこそ初めて、感動を呼ぶ自然の紹介にもなるのではないかなと思います。

**人工林というのは、「びっくり箱」のようなネタの宝庫です。
歴史があります。人の営みを感じます。伐採したり、また植えたりという、
一種のロマンみたいなものがあるのではないかなと思います。**

これは川上村の一番奥の三之公というところの写真です。先ほどちょっと説明が村長のほうからありましたとおり、原生林を村が買い取って保全しているところですが、ここはなかなか素晴らしいです。この前行って見せていただいたのですが、明神滝もありますし、足元にはヒルがいっぱいいますしね。ほんと、楽しかったなと思いました。

(笑) 本当に素晴らしい自然なのですが、これは一時期、伐採の危機に遭っていたといいますか、ほとんど、半分以上は伐採されたのですか。パルプ材として、山を丸刈りにしてしまったのです。けっこう問題になって話題になったわけですが、そのおかげで、逆に村はそれを、残った部分を買取ったことになるのですが、ちょっとこれを見てください。

この写真が伐採のあとの写真です。これだけ全部刈られています。まだあまり植生が回復していないところが残っています。それほど伐採しています。放っておいたら、全部、こっちも伐ってしまったのでしょうか。最後の伐採から7・8年ぐらいでしょうか。大体20年ぐらい前から伐採が始まって、そのあいだずっと切り続けてこんな状態になったのです。でもかなり回復してきています。

背は低いけれども、だんだん緑が回復しています、いわゆる雑木林状態です。ここは崩れたところです。また近くに買い取って保全した原生林があります。こちらのほうを見た

ら人工林があります。つまり、この奥地へ行くと原生林は見られるわ、人工林が見られる。そして、破壊された跡も見られれば、回復しつつある雑木林も見られるという、なかなか面白い地域です。

ほぼ10年、20年たつと少しずつ、森といいますか、緑が回復してくるということを見られるということ自体が、自然の営みとしては非常に貴重ですし、これを伐ってしまった人間もいれば、これを回復しようと思って努力している人たち、今日は和歌山県の方が来られているとお聞きしましたけれども、そういうかわり、人の営みも感じるができるのではないかなと思います。

もちろん人工林を見て「いったいこの樹齢は何年か」ということもあるのですが、単純に樹齢何年かというのではなく、では誰が植えたのか、その後、どんな世話をしたのだろう、そういうことをちょっと感じるのも面白いのではないかな。「もしかしたら、これは土倉さんが植えた木かもしれないな」と感じていくと、けっこう明治時代の息吹を感じることができるかもしれません。

人工林というのは、そういう目で見ますと非常に面白いといいますか、タイトルではないですけど、「びっくり箱」になるようないろいろなネタの宝庫ではないかなと思っています。歴史があります。そして、人の営みを感じることもできますし、伐採したり、また植えたりという、一種のロマンみたいなものがあるのではないかなと思います。

私が奈良県の森林環境教育指導員の資格を取るときは、奈良県庁の前の街路樹のところで、橿原神宮で研修を受けたのですが、もちろん、それはそれで面白かったです。コンクリートと街路樹のところでもこういう自然を発見して、そして、それを説明する方法もあるのだということを教わるのもなかなか刺激的でした。それはそれでいいのですが、やはりもう一つ突っ込んで言えば、もっと豊かな素材を欲しいなという気がします。ただし「豊か」というのは「自然が豊か」という意味ではなくて、その素材のバックにあるドラマといいますか、そういうものが欲しいなと思います。

小さな自然にも、自然だけと言わずに建物も含めた構造物でもいいのですが、それぞれ歴史があるわけですし、それにかかわった人の思いがあります。それを伝えるのが最も心を打つものではないかなと、それが一種の環境教育へつながっていくのではないかなと思います。

吉野というのは、そこに栄えた林業ももちろんですけども、それこそ神武の創世から始まって、南北朝から、いろいろな歴史の宝庫です。同時に、そこにいた人々の話も伝わっています。そして自然は豊かです。その豊かな自然も、人工のものもあれば、太古の昔から残っている原生林もあります。こういう意味では、本当に「びっくり箱」のようにいろいろなネタが詰まっているのですから、これを利用しない手はないだろう。「環境教育として、もってこいの場所である」と強調して終わらせていただきたいと思います。

最後にこの写真は、吉野山から撮った写真ですけれども、これほど豊かな森があります。といって全部人工林ですけれども、高さが違いますよね。植えた時期が違うわけです。ここには広葉林が残っていますし、伐採した跡もありますし、ひと山見ただけでいろいろな自然があります。ぜひ吉野山を見てほしいと思います。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

【司会】

田中様、ありがとうございました。

奈良らしく天平の時代にさかのぼったところから、昔は日本から森が減っていったいた時期があったことを興味深くお話いただき、人工林に代表される森というか、自然と人のかかわり、そしてその森と人のかかわりを見つめていくところに、森林環境教育のヒントがあるということを伝えていただいたように思います。ありがとうございました。

もう一度、大きな拍手をお願いします。

後ほど森林放談で再度ご登壇いただきます。

体験校報告

川上村と森林環境教育

橿原市立白樫北小学校 山本 公雄 先生

昨年 10 月、5 年生担任教諭として児童 52 名で原生林「水源地の森」の散策体験を実施された。11 月には森と水の源流館から「出張源流教室」に訪問し、森で感じたこと、気づいたことなどの振り返りや原生林に対して、人工林は木を伐ることが大切で、身近なところで木を使うことについての学習を行った。

和歌山市立教育研究所 市川 圭造 先生

昨年 10 月、和歌山市立雄湊小学校 5 年生の担任教諭として、40 名の児童とともに川上村を訪問。村内のホテルを利用し、1 泊 2 日で「水源地の森」散策や、人工林の見学、大滝ダム学べる見学ステーションなどで体験学習。市川先生は他校での就任時を含め、過去にも川上村での体験学習を行っている。

【司会】

昨年度、小学校の学習において、川上村にお越しいただいた、学校の先生に、本日まで出席いただいております。この近く、樫原市立白樫北小学校の昨年度5年生を受けもたれていた山本先生です。奈良県が取り組む森林環境教育の指定校として、昨年の森林環境学習の指導をされました。

森と水の源流館では、水源地の森のご案内や出張源流教室というかたちで、お手伝いをさせていただきました。1年間でどのような学習を展開されたか、ご苦労ばなしや課題、また成果といいますか、子どもたちの感想なども含めてお聞きしたいと思います。

【山本先生】

白樫北小学校の山本といいます。このような多くの方の前でお話しすることというのは初めてですので、大変緊張しております。言葉もおかしくなるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。では発表のほうを始めさせていただきたいと思います。

昨年度、本校では森林環境教育に取り組むことになり、5年生でこの取り組みを実施しました。本校は白樫ニュータウンというほとんどが住宅地の中にありますので、なかなか



自然というものが無いように思います。しかし鳥屋池や水田、畑、高取川のように人工的に作られた自然が多く残っている地域です。しかし、子どもたちにとっては、本当の自然のことはよく知りませんし、子どもたちの自然や周りの森林に対する意識とか関心というものもあまり高くはありませんでした。そこで、まずこの取り組み、学習を始める前に森林環境学習の活動計画を立てました。

ここに示します計画は、事前に細かく立てていたわけではなく、毎年行われておりますこの野外活動以外は、子どもたちとの活動の中の話し合いや、森と水の源流館の方々との話し合いの中で一つずつ細かく決まっていきました。

まず始めに、本校では例年行われています野外活動を実施しました。この中では少しでも自然を感じてもらおうと考えました。そこでグリーンオリエンテーリングでは、木の名前や特徴が分かるようなワークシートをつくって、子どもたちにグリーンオリエンテーリングの中で木の特徴、葉っぱの形などをしっかりと見てもらうようにしました。そして、木のアスレチックでは木を使ったアスレチックを身体で感じて、楽しんでもらうようにしました。また野外炊飯やキャンプファイヤーなどでは木で火を起こすことをしてもらい、その中で子どもたちに木を材料として使うということを体験してもらいました。子どもたちの感想としては、「スギの葉ってこんな形してたんや」とか「この木は家の近くにあるよ」とか「薪で起こした火で作ったカレーはめっちゃおいしいなあ」など、人と物の存在や働きを少しでも身近に感じてくれていたように思います。

2学期になり、子どもたちの中で木や森林についての関心がより一層高まってきました。そんな時、国語科の教科書の中で、「森林の贈り物」というものを学習していました。その中の学習の時に、私の学級のある児童から「うちのおじいちゃん、宮大工してんねん」という声がありましたので、その宮大工という伝統的な職業の方に、実際にいろいろな体験をさせていただいてはどうかということをお願いしたところ、快く引き受けていただきました。ここでは、お寺や神社に使われる木材の説明を設計図などを見せてもらったり、実際にいろいろな種類の木の板を提示していただいて、説明を詳しくしていただきました。

その中で、今は使われなくなったそうなのですけれども、やりのような形、これを「ヤリカンナ」というそうなのですけれども、この「ヤリカンナ」の実演には子どもたちも「こんなふうに木を削るのか」という感心の声をあげ、熱心に見ていました。

また、この説明を聞いた子どもたちは、「宮大工さんは木の性質を知っていて、いろいろなところに、その木の性質が生きるように使い分けているのがすごいなあ」という声をあげて感心していました。

また、説明だけでなく実際の体験をさせていただきました。カンナ体験では、ヒノキ材を削らせていただきました。子どもたちは、削ったヒノキくずを匂いながら「とてもいい匂いがするな」と何度も何度もひのきの香りを楽しんでいました。

ノコギリの体験もさせていただきました。ノコギリの体験では、あらかじめ木材のところにいくつか穴を開けていただいていて、それをペン立てにして作らせてもらいました。

子どもたちは切った後もヤスリできれいに磨いて、とてもきれいなものにしていました。体験した子どもたちは、「力のいる仕事だな」「木の種類によって匂いや硬さも違うんだな」と言っていました。

その後、子どもたちにもっと森林のことを知って欲しいという思いから、どこかでそういった体験をさせてもらえないだろうかと考えていたところ、昨年、校外学習で利用させていただきました森と水の源流館の方に相談することにしました。そこで、源流館の方から「水源地の森を見学できますよ」というお話を聞き、そんなところがあるのならば、ぜひ見学させていただきたいなということになり、お願いしました。

子どもたちは、見学のポイントを事前に考えたりして、見学の準備を整えてから森のほうに出かけました。見学に向かうのに服装の注意事項などもあって、子どもたちは「一体どんなところに行くのかな」とワクワク、ドキドキしながら実際の見学に向かいました。

実際の見学の様子です。「山に入る時には山の神様にお祈りをしてから入るんだよ」と説明してもらい、子どもたちは「へえー、そうなんか」というふうに聞いている様子です。この見学の中では、源流館のスタッフの方が丁寧に原生林の中の説明、それから周りにある人工林の木々の説明、または実際の葉っぱや木の名前なども詳しく、丁寧に教えてくださいました。

「水源地の森」の中はかなり涼しく、そして暗かったです。子どもたちは普段と違うところを歩きますので、足場の悪さに苦戦しながら1時間涼しかったはずなのに、降りた時には汗だくになって下のほうに降りてきました。森の中では普段見ることのできない木々やキノコなどを見つけて、声を出しては楽しみながら見学することができました。

この見学をした後の子どもたちの感想を紹介したいと思います。「木が自然に生えているので、いろんな形の木がありました」「木々の間隔もバラバラでいろんな木の種類があった」「サロンパスの匂いのする木があった」「スギの木の名前の由来は、まっすぐと何度も言うまっすぐになるので、スギになることを初めて知りました」「木を使うことが森林のためになることを初めて知った」「水がとてもきれいでびっくりした」「川の水がとても冷たかった」「ヒルやマムシなどの危険な生き物がいても、もう一度行きたいと思いました」「森林はとてもすごい力を持っているんだなと思いました」など、いろいろな感想を持ち、自然の素晴らしさ、心地よさを感じてくれました。

この写真は、事前に空のペットボトルを持って行かせていただいて、帰りに子どもたちはくんでおいしい、おいしいと言って一週間ほど冷蔵庫に置いている子もいましたので、とても大切に飲ませていただきました。

そんな楽しい体験をした中で、楽しかったという思いと共に、現在、森林が抱える問題についても関心を寄せていたように思います。学校に帰ってから、この見学で子どもたちから森林についてのさまざまな疑問が生まれました。その疑問に答えていただくようなかたちで出前授業をしていただきました。「森を思う授業」と題して行っていただきました。

この出前授業の中では、川上村の森林や水の話、天然林や人工林の働き、木材の活用方

法、現在の森林の状態など、多くのことを詳しく話していただきました。子どもたちは自分たちの疑問に思っていたことでしたので、真剣に聞き入っていました。パソコンでいろいろな資料や写真を見せていただいて、「学べる屋台」を使って実際に木を木材として利用して作ったものを紹介していただいたりと盛りだくさんの内容でした。

また、説明していただくだけではなく、お話のテーマごとに子どもたち自身が考え、自分の考えを出し合って、交流するような授業をしていただきました。この授業を聞き、新たに生まれた疑問にも分かり易く答えていただきました。

この授業の子どもたちの感想を紹介したいと思います。「車が1年間に吐き出す二酸化炭素をスギ160本で吸うことができることにびっくりしました」「学べる屋台では、いろんな木の使い方を知りました。とても面白かったです」「今日、森の授業をして、木で新たに何を作ることができるだろうと、今までは考えなかったけれど、考えるようになりました」「森の木は私たちを守ってくれているんだなと思いました」など、数多くの子どもたちが木をもっと大切にしたいという感想を言っていました。

この授業を通じて、子どもたちは森林が抱える問題や自分たちに何ができるかということをも深く考えるようになったと思います。そして、この授業や「水源地の森」の見学から、自分たちが知ったことを他のみんなにも伝えようということになり、自分たちが知ったことで個々に興味を持ったことをテーマにあげ、そのテーマごとにグループを作り、発表に向けて準備しました。

テーマ項目としては、「木材の利用方法」や「原生林と人工林の違い」など、そういったことを発表の中身にしていました。また、発表の中では、自分たちにできることというのを各グループが考えをまとめ、発表していました。

これが発表の様子です。まずは自分たちの家の人知ってもらおうということで、発表会は参観日に行いました。自分たちの調べたことや考えをしっかりと発表していました。発表した後で「自分たちに何かできることというのを、発表したのはいいいけれども、実際には自分たちは木材を使ったものを何も作ってはいない」ということになり、何か自分たちでは作れないかということが子どもたちの中にあがりました。

その話し合いの中で、ある子どもが「教室のプレートを作ったらええやんか」という意見があって、それは面白そうだなということで、木工クラフトとして教室のプレート作りをしました。これはひのき材の板を使って、一つひとつ子どもたちが下書きからし、彫刻刀で削り、ニス、それから水彩絵の具を使って一つひとつ丁寧に仕上げていきました。これは現在学校の教室につるしています。

このような活動を1年通じて行っていました。この感想としては「森林の偉大さ、大切さを実感できた」「森林と人とのつながりを知った」「体験的な活動のお陰で森林を身近に感じる事ができた」「森林やその他の環境問題について関心を持つことができた」ということです。

子どもたちにとっては、森林は、自然は大切なものだということは分かっている、な

なかなか普段からどうしていいものなのか分からないのが実際だと思います。しかし、このような経験から私たちができること、私たちが新しいことを考えていくんだという思いは子どもたちみんなが持ってくれていたように思います。

この時間の中で皆様に取り組みの全てを伝えることができたかどうか分かりませんが、少しでも伝わっていれば幸いです。つたない発表を聞いていただいて、ありがとうございました。これで私の発表のほうを終わらせていただきます。

【司会】

つづいては、遠く和歌山市から市川先生にお越しいただいております。

和歌山市は源流川上村から流れ出た水が、吉野川となって、紀の川と名を変えての旅の最後、海へ出ようとするところのまちです。そんな「つながり」がある和歌山市で、市川先生は現在、和歌山市立教育研究所に所属されています。昨年度は雄湊小学校5年生を受け持たれて、1泊2日の泊りがけの学習で川上村にお越しいただきました。

そのときの様子なども含め、市川先生にお話いただきます。

【市川先生】

私は和歌山市の教育研究所というところで勤めております。私がなぜ和歌山市からここにやってきたかというお話を始めに少しさせていただきたいと思います。

和歌山市には、紀の川という川がありまして、もちろんみなさんご存知のとおり奈良県に入れば吉野川です。その紀の川でつながっているということで、川上村とは以前から加太小学校、加太という海の町があるのですけれども、その小学校の児童と川上村の小学校の児童が交流をしているというようなこともあります。

私は実際、加太小学校に勤めていたわけではありませんが、でも、私ほど和歌山市の教



員の中で川上村に貢献している教員はないと、これは確信しております。3回ほど子どもたちを連れてきたけれど「ええとこやで」と、もちろん言いますし、一般の普通の人にも「川上村にいっぺん行って来て。ええ温泉あるで」、そういう話を常にさせていただいています。それから、ダムのパスターのコンクールとかもいつもやらせていただいています。ほんとうに私ほど貢献している者はないと思います。川上村の準村民であるとか、仮村民であるとかいうようなものも任命していただきたいくらいです。(笑) こんな話していると15分があっという間になってしまうと思いますので、ちょっと本題のほうに入らせていただきたいと思います。

私、実は5年前に初めて川上村のほうに参りまして、その時、和歌山大学の附属小学校の教員をしていました。4年生を担当していて、紀の川をとにかく上流の大台ヶ原から自分たちの学校がある河口まで、135キロくらいあると思うのですが、「1回歩いてみようやないか」ということで上流から歩いて勉強してみようということで、1年かかったのですが、そういう勉強をしました。このお話を少しさせていただきます。それから、昨年度、今度は公立の雄湊という小学校、和歌山城がある街なかの学校なのですが、その時にも川上村へ1泊で寄せていただいて、今度は林業も勉強させていただきました。この二つの実践をちょっと短い時間ですが、お話をさせていただきたいと思います。

子どもたちと一緒に大台ヶ原に行きまして、この時に子どもたちが川上村とも出会うということになります。こうやってずっと歩いていくわけです。雨の日ももちろん寒い日も、風の日もずっと歩いていくのです。もちろん1日で行けませんから、約20回くらいかけて行くのです。1年間かけてずっと川の土手を歩いて行きました。

子どもたちは、初めは特に1年間の長い学習になりますから、何を学びたいというようなことも特にございませんでした。私自身も歩いている中でいろいろなことが学べるかなというようなかたちで入った学習です。子どもたちは、初めは紀の川の河口の汚さを知っていますから、「上流の吉野川ってきれいなんやろな。一体どこから汚くなんねやろな。この辺を調べてみたいわ」というような子もあつたし、「吉野川と紀の川の境目って先生、一体どないなってんねやろな。はっきり分かるんかな」。この写真は五條市の二見です。落合川といって、ちょうど紀の川と吉野川の境目になると思います。こういうところで実際自分の目で確かめたいな。子どもたちは歩いてみて、和歌山県の橋本へ入ったあたりで「先生、川原の石が真っ白や」。今まではそうではなかったのですが、橋本へ来た途端真っ白で「先生、何か匂いがする」。もう明らかに橋本あたりから汚れている過程を目でも確認してまいりました。

そして、5月頃に始まった探検がやっと2月にゴールを迎えたわけですが、この写真は和歌山市の紀の川大堰というのがあります。そこに「水ときらめき紀の川館」というのがあるのですが、そこで最終的に紀の川を歩いて学んだことを子どもたちも発表したわけです。源流館の館長さんもお招きして、ラジオの番組で、公開録音でやったのですが、こういうことをしました。

「水ときらめき紀の川館」と言いましたが、これはどこかで聞いたことがあるような感じでしょう。「森と水の源流館」、「水ときらめき紀の川館」、似ているでしょう。実は名前を応募してまして、うちのクラスの女の子が「森と水の源流館」へ行った時の印象が強かったので「ぜひ、あんなところになればいいな。みんなに好かれるああいう場所になればいいな」ということで「水ときらめき紀の川館」と応募したのです。それで、見事に選ばれて、そういう名前になったというわけです。

実際は私も子どもたちも一番印象に残っているのは、やはり、この探検の中でいろいろな人と出会ったことです。これはやはり忘れられないです。この写真はちょうど吉野川になるのですが、製材所の方とか、先ほど田中さんからお話ありましたが、割りばし作りの方とかに実際、工場へ行かせていただいた時にお話を聞かせていただいたり、それからこの下は近鉄電車に乗っている時の様子なのですけれども、アユ釣り名人、村田名人という名人らしいのですけれども、電車の中で出会ったとか、こういうことはやはり、すごく印象に残っています。

子どもたちは、川に人がいると必ず寄って行くのです。「おっちゃん、何してんの」と寄っていく。そこで聞く話は「おっちゃん、子どもの時、紀の川ってどんな川やったん？ 今よりきれいやったん？」とか、大滝ダムっていうのを知っていましたから、「大滝ダムができてから、紀の川が変わったことあんの？」とか、そういう話をそこで会った方々に聞いていくわけです。

こういう活動を繰り返していったのですが、その中でも、やはり川上村で出会った方々というのは、子どもたちにも私にも一番印象に残っております。ご存知のように今日も来られていますが、「達ちゃん」と私たちは呼んでいるのですが、森と水の源流館の館長の達ちゃんです。それから当時、インストラクターをされていた今福さんという方なのですが、「ジミー」「ジミー」と私たちは呼んでいました。このお二方です。水源地の森へ連れて行っていただいて、いろいろな話、森のこと水のことを話していただいたことというのは、ものすごく印象に残ったというような経験があります。

それから、あとやはり大滝ダムです。子どもたちは大滝ダムのことは、初めはもちろん見学も行かせていただきました。今日も来ていただいているのですが、見学行った時のきれいなお姉さんの田中さんとかがおられて、心優しく説明してくれるので、子どもたちは大滝ダムが大好きというか、素晴らしいものだと思います。

例えば、洪水があった時にでも大滝ダムは自分たちを守ってくれるのだ、それから、自分たちの飲み水を大滝ダムで確保してくれるのだということで、大滝ダムの勉強に入ったわけですが、その勉強しているうちにこれです、「大滝ダム反対。これは一体何の写真なん？」ということで、これは川上村で大滝ダムができると言った時に30年か40年ぐらい前、ちょうど伊勢湾台風の後だと思うのですが、「こんなことがあった。これは一体どういうことや」と。「あんな素晴らしいダムやのに、なんで反対する人がいてたんや」ということでこの学習を始めました。

最初は大変難しかったのですが、1回達ちゃんに聞いてみようかと。「達ちゃん、大滝ダムつくるの反対したん?」「ううん、そうやな。わしらはな渋々やってん。和歌山市とか、河口の人のために渋々賛成したんや」という話を聞くわけです。そんな中で子どもたちはもちろん、川上村の方の思いも知っていくわけです。

それで、ちょうどその頃です、テレビをつけるとニュースで白屋地区のひび割れというのが連日報道されたわけです。だから子どもたちはもちろん、それも重ねて川上村の人が自分たちのために、こういう美しい自然を壊してまでやってくれたのだ。では「おれらはどうしたらいいんや」というようなことを話し合いました。

それで子どもたちは和歌山駅とか、いろいろなところでアンケートを取るわけです。「大滝ダムをどう思いますか」「大滝ダムがあつて良かったですか」。ところが、1000人に調べてみて大滝ダムを知らないという人が和歌山市民の中で8割位です。それだけニュースでやっていたにも関わらず、それに子どもたちは驚くわけです。

だから子どもたちが、大滝ダムがいいのか悪いのか、こんな決着をつける必要はないのです。ただ、自分たちに関わる水のことです。それをやはり自分のこととしてとらえていかなければいけないのではないかということです。子どもたちは、達ちゃんや大滝ダムとの出会いの中で学んだというのがこの実践です。

それから、これは昨年度です。日本の林業について考えるということで、ちょっと林業が停滞している。これは和歌山県であろうが、奈良県であろうが同じことです。でも、いっぺん子どもたちと真剣に林業について考えてみようかということで川上村に、その時も来させていただきました。マックが写っています。木村さんです。

マックにも「もし、あれやでみんな。森がなかったら、森のやってくれている仕事をお金を払ってすれば、これだけせなあかんねんで」というようなことも教えていただいたり、達ちゃんには「みんな見てみい。これは人工林や。人工林は伐って育てるんや。切らなあかん森なんや。こっちは天然林や、これは切ったらあかん森なんや」とこれは何回も聞きました。

子どもたちは、やはり勉強を始める前に林業についてのイメージというのは、木を伐るということですから、自然破壊というのをもちろん言っていましたが、川上村で達ちゃんにその話を聞いて、実際にこの手入れの行き届いた人工林と、手入れの行き届いていない人工林を見ていくわけです。その中で「やはり林業というのは大事なことなんやな」というようなことに気づいていったわけです。そして、これは和歌山県の美山村という、林業の盛んな場所なのですが、そこで実際に林業に従事している方と関わりを持つわけです。この男の子なんかは、チェーンソーでバットを作ってもらって喜んでいます。この子は「宝物や」と言って今でもたぶん大事にしていると思います。これは除伐、間伐している写真です。林業されている方で、割りに若い人が多いのです。そういう方々と一緒にお弁当を食べて、「お兄ちゃん、好きなテレビ番組なに?」とこんなことを聞くのです。そしたら「天気予報や」「ああ、そうか。やっぱりなあ、林業する人は天気予報って大事なんやなあ」と

というような話をしながら勉強しておりました。

そんな中で、ある女の子が「先生、林業する人って減ってるって聞いてるけど、これってやっぱりこれから減り続けるのかな」というような疑問を持ち始めます。その子がこう付け加えました。「私ね、林業減ったらいろいろ困ることあるんよ。だから林業やる人は、ぜひ林業を続けて欲しいんよ」というようなことを言いました。

この子は割と賢い子なのですが、この「林業を続けて欲しいんよ」というのは、これはあくまでも人ごとです。自分が関わるのではなくて、林業している人に林業を続けて欲しいという人ごとなのです。そこから、勉強がスタートしました。

そして、最終的にはいろいろと話し合いとかしながらやっていくのですが、やはり先ほどと一緒にです。今日、先ほどこの会場で達ちゃんのビデオが流れていました。その時に達ちゃんが「自然を守るのではなくて、自分らが自然に守られている」とおっしゃっていました。全くその通りなのです。

林を伐っていくことで自分らが困るのではないか。だから、確かに自分らは林業できないかもしれないけれども、これはやはり自分らの問題なのだと、人ごとではないのよというようなことは、子どもたちは林業がどうなっていくかという中で、考えてくれたのかなと今は思っています。

実際にダムはどうかとか、林業はどうかと、結構重たいテーマで話をしたのですが、子どもたちにとってはこの自然の中で活動できたということが何より楽しかったようです。それこそ、川の水をじかに飲むなんてことは考えられませんから。それから五色湯、この温泉へ浸かってみんなで今日楽しく過ごした。ヒルに吸われた子もありました。風呂から出てきたら「先生、足にヒルついてる」「今、風呂入ったんちゃうんか」風呂出て来てから、まだ足にヒルがついていた子がいたり、そういう体験もしながら、とにかく自然の中でいきいきと活動できたということも、何にも増していい経験になったのだなと思います。

「紀の川友だち」と書いています。これは子どもの言葉なのです。「私たちと奈良県の人には紀の川で結ばれた友達だ」と、そういうことを子どもが言ったので、「紀の川友だち」というタイトルで勉強したのですが、和歌山市と川上村、奈良県、ちょっと遠いです。私も川上村は車で3時間かかりますが、紀の川ということを考えると本当につながっているのだ、今後とも和歌山市、紀の川と手を携えて頑張っていけたらなと思っています。

本日はお招きいただき、ありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

【司会】

お二人の先生方、ありがとうございました。子どもたちのおどろき、発見、感想などの声が手に取るように伝わってまいりました。学校での環境学習に少しでも川上村や森と水の源流館の存在がお役に立てたようでしたら、本当にうれしいことと思います。

この先生方の発表をいただくことを、実は昨年のシンポジウムから行っております。昨年、違う2校の先生に発表をいただきました。本日は会場に学校教育関係者だけでなく、森林や環境にかかわる行政関係者、そして企業の方、市民の方々にもお集まりいただき、それぞれのさまざまな視点から森林環境というテーマに関心を抱かれていますと思いますが、そのように少し立場が異なる人々が集まって、このような学校での取り組み、子どもたちがどのような体験や学習をしているかを知るということは、とても大切だと思っています。何か大きな発展へとつながることも期待できると思います。ですからこの先生の発表報告は、毎年、先生にはご負担をお願いしておりますが、来年もぜひ続けていきたいと思っていますので、なにとぞご理解とご協力をお願いいたします。

森林放談

田中淳夫 × 辻谷達雄（森と水の源流館 館長）

辻谷 達雄 プロフィール

森と水の源流館 館長。1933 年（昭和 8）、日本三大美林のひとつ、吉野杉の中心地、奈良県吉野郡川上村に生まれる。地元の小・中学校を卒業後、15 歳で山仕事に従事する。71 年に独立し、林業請負業「ヤマツ産業有限会社」を設立し、テレビ CM を活用したりユニークな経営方針で知られる。「林業不況」に抗して都会からの山仕事希望者にも就職の門戸を広げ、林業後継者の育成にも力を入れている。また自然観察指導員として都会の自然愛好家とのパイプ役となる活動への要望が年々高まり自身で主宰する「山の学校 達っちゃんクラブ」は、昨年（07 年）10 周年目を迎えた。

森と水の源流館では、都会の人々に、山で生きる技と知恵を体験とともに伝えている。

2002 年（平成 14 年）「緑化功労者農林水産大臣賞」受賞

2005 年（平成 17 年）「緑化推進運動功労者内閣総理大臣賞」受賞

【森林放談 田中淳夫×辻谷達雄】

司会

では、この後は、基調講演をいただきました田中淳夫様と森と水の源流館 辻谷館長による「森林放談」に入ってまいります。お二人それぞれの人物像や、これまでの道のりについては、あらためてご紹介いたしません。ここからの語り合いの中で、みなさんにはきっとお伝えできることと思います。

「放談」ということで、司会やコーディネーターという役割は抜きに進行いたします。どんな話が飛び出するか、また語り合いの行方は、どこへと向かうのでしょうか。この「放談」の唯一のルールを予めお知らせいたします。どれだけ盛り上がりながらも、会場の都合もございまして、時間が参りましたら、私のほうからストップの号令をかけることとなっています。では、お二人よろしくお願いいたします。

田中

ということで、時間は知りませんが、何もルールがないとされています。前々から「放談だから何しようかな」「何しようかな」と言って、結局何も決まっていないところもあるのですけれども、今日とりあえず、私が口火を切るということになっておりますので、私のほうから喋らせていただきます。

ちょっと振り返りますと、先ほども言いましたように、私が川上村を訪れたのはちょうど20年前、「ホテル杉の湯」のオープンのときです。最初にお会いしたのが、まさに今、ここに座っていらっしゃる大谷村長。当時も村長でございまして、その隣の副村長の栗山様は当時、杉の湯の支配人で、髪の毛がまだもっと黒々としていたという記憶があります。当時から本当に20年たったのだなと思います。

あと、上田さん、会場にいらっしゃるでしょうか。いらっしゃった。当時、産業振興課の課長だったと記憶しております。そのみなさんにお世話になって、初めて川上村の地を踏んで「ああ、ここが噂の」・・・というのは、私は大学は林学科を出ておりますので、吉野林業というものはもちろん、耳にこびりついてはいるのですが、実は吉野林業そのものの土地を踏むのは、そのときが初めてでした。ですから、非常にそういう意味では感慨深いものがありました。それからスタートしたという私です。

林学科を出ているといっても、本当の現場の林業を全然知らないのではないかという思いがありましたものですから、ちゃんと一から林業を勉強した



いということで、その時に浮かんだ地も、やはり吉野で、また川上村を訪れました。たしか上田さんだったと思いますけれども、願をいしまして、そして紹介されたのが実は辻谷さんなのですね。そして記録によると1993年の4月に初めてお会いしたという次第です。

辻谷

田中さんのお話のとおり、1993年の7月10日の夜のことでしたね。「役場で紹介されましたので」ということで、夕方うちに来られました。それで、「林業の話をせえというが、しかしあなた、林業の話を聞いて何をしますんか」と聞きましたら、「林業の本を書きたい」と言われたのですが、「ふーん。あんた、どこの学校を出ましたんか」と言ったら、「大学の林学部を出ています」ということでした。それで「林業は、そんな簡単なものと違いますで。私は、話せえ言うたら寝やんとでも一晚話をしますけれども、それだけで本、書いて果たしてみんな読んでくれるかな、というのが私の疑問です。本当にみんなに読んでもらう本を書きたいんやったら、ちゃんと林業の現場に足を運んで、うちの作業員と一緒にいろいろな作業を体験しながら林業でどんなもんかということを理解してから書いたらどうですか。どっちにしますか」と聞いたわけです。そうすると田中さんは、「それやったら、できる限り現場に通わせてもらいます」ということでした。それから、何回か来てくれましたねえ。



田中

記憶では月1回、だいぶ通わせていただきましたね。通って実際に作業をするというのは望むところだったのですが、きつかったのは「川上村の柏木に朝6時集合」と言われて、当時私は大阪に住んでおりましたので、朝4時に家を出る。つまり、起きるのは、どんなにぎりぎりでも3時半には起きて、4時に出て、車を飛ばして6時までには着かないといけない。これがきつかったという記憶があります。

ただ、本当に植え付け、木を植えるところも、その前の地ごしらえから、間伐、枝打ち、全部させていただきましたので、本当にいい思い出です。思い出というか、本当にあのときの経験がなければ、今の私はないかなというぐらいに思っております。

辻谷

大変だったろうと思います。当時のことを思い出すと、全く素人の人が、そんな厳しい朝早くから出ていただいて、雪の日もあったと思うのですが、その中できちんと一通りの林業技術を一緒になって経験されたということについては、今でも感服をしています。

田中

ありがとうございます。私は一緒にやって、仕事で多少は役に立つかなと思ったら、どうも立ってなかったなというのは、後で感じているのです。初っぱなに植林に行って、私も100本ぐらい植えたという記憶があるのですけれども、後で聞けば「あれは、全部シカに食われたよ」と言われた記憶がありますね。

役に立ったかどうかはともかく、本当にゼロから、単に机上の学問でないものを覚えたということは非常に価値があったと思うのです。それで、ちょっと私も仕事上、出版社と付き合いがあるのですが、「山仕事をしている方の本を作らないか」ということがある出版社から依頼がありまして、それならすぐに浮かぶのは、もちろん辻谷さんだから、辻谷さんに書いてもらおう、ということで、私もお手伝いするかたちになりました。これが1997年という記憶ですね。

辻谷

そうですね。

田中

何度も通いながら話を聞いて、どういうかたちでまとめるかというお手伝いをさせていただいたことが、次の段階ですね。

辻谷

そうです。たしか1997年の3月9日です。郡山城址で奈良県の「自然観察みどりの会」の会合の後で田中さんと打ち合わせをさせていただいた。それから延々といろいろと取材をしていただいたのですが、やはりその元になったのは、私が今でも続けていますけれども、日記なのです。ちょうど60年、60冊の日記になっていますけれど、実は昨日も日記帳を見返してみました。その日記を元にいろいろ当時のことを思い浮かべながら、田中さんにきちんとまとめていただいたというのが実はこの本です。タイトルも面白いタイトルでして『山が学校だった』という本です。

田中

最初に会ったのは郡山城址なのですが、その後は辻谷さんの家に通わせていただいたのです。そして昼前に着いて話を聞いて、昼ご飯を出していただくということになっていました。見ましたら茶がゆがあるのですが、私に茶がゆを出してくれないのです。白いご飯を出されるのです。いや、何かお客さんだから白いご飯を出されて、私は茶がゆを食べたいなということで、その白いご飯を置いておいて、「こっちを食べさせてください」と言った記憶があります。本当にあのときも大体、月1回か2回か通いながらお話を聞かせていただいて、ある意味、あの体験がなければ、またまた今の私がないということに何度もなります。

当時、私はもちろん森林や林業のことを扱ってはいたのですが、ある意味、言葉は悪いですが「他人事」だった部分があると思います。基本的には、私はまちに住んでいて、まちにはない世界としての山村、そして林業という世界をのぞき見ると

いう、そういう立場だった気がするのです。ちょっとのぞいて探検するというような、知らないことを知って喜ぶという、そういうレベルの部分もあったと思います。

それとある意味、言葉は悪いですけども、山村の方というのは自分とは別の人種というか、別の世界の人たちというような意識もたぶん無意識にあったのではないかなと、いま振り返ってみて思います。ところが、この話を聞かせていただいて、まさに当時、たしか達ちゃんは 60 歳ぐらいでしたか。

辻谷

そうです。

田中

あの当時ですから、もう 40 年ぐらいの林業経験を聞かせていただいたわけです。40 年どころではないです。15 歳だから 45 年間を聞かせていただいたのです。それで実際、戦前からの子どもときの遊びの話から、当時の家の形とか、こまごまと聞かせていただいて、そこからそこは増築して、自分で作った家なのだと、そういうことも聞かせていただいた。食べ物の話から結婚する話からと言ったら、やはりそこで生きている人々の、生活、営みがそのまま直に伝わってくるといいますか、単に山村をのぞき見るのではないものが目に入ってくる、これが非常に大きな体験で、ここからはまち、ここからは山村という分け方ではなく、一帯がつながっていて、実際山村で作ったものがまちで使われるとか、逆にまちのものが山村へ来る。特に吉野の場合は結構山村と言っても歴史的交流が大きいと言いますか、映画館も実はあったのですね。

辻谷

そうです。

田中

芝居の話を聞きました。そういうのをやはり直に聞くというのは、これほど大きいのかと感じたところです。結構、迷惑かけたのではないのでしょうか。根掘り葉掘りプライベートなことを聞きまくったという気がしています。

辻谷

ええ、みんな白状したつもりです。



田中

先ほど先生の発表にあった、ダムの反対運動の話も聞きましたし、土倉庄三郎の話聞いたのもそのときです。本当、今につながるものが全部あの時点にあったのではないかなという気がしております。おかげさまで、本のほうは非常によく売れました。売れ過ぎまして、いま売り切れなのです。本当はこの会場に持ってきて売りたいかったのですけれども、もう残ってないということで、何とか再版をしたいと思っていますので、またみなさんに声を上げていただき、出版社に圧力をかけてほしいなというぐらいの気持ちでおります。

さて、当時から振り返ってどうでしょう。15年、20年前ですか、当時も林業が苦しいという話をしていたのですけれども、その15年前と今と比べて吉野林業、もしくは川上村はどうでしょう。

辻谷

そうですね。もう今日は林業関係者の方もお見えですし、現状はみな、もう把握はされております。林業を60年もやってきて、「林業の話をするのが嫌だ」というのはおかしい話ですけれども、本音を言いますと、本当にもう語るのが心苦しい事情、状況になっているのです。もう代価にしてみても、伐採量にしてみても、労働力にしてみても、かろうじてまあ30%ぐらいに下がって落ち着いたぐらいかなと思います。ほかは、もう70%ぐらいの落ち込みなのです。もう正直言いまして、どうもならないというところです。本音を言いますけれどもね。

田中

どんどん言いましょう。林業関係者の方も多いことですし、言いたいことを。

辻谷

みなさん、私も含めて、もう答えは分かっているのです。まあ言ったら、材木の値段が上がったらすべてが解決できるというのは、これはもうはっきりと答えは分かっているのです。が、そこに行き着くまでのいわゆる方程式が正直言っていないのです。それで今、みんな林業関係者が出会いましても、何か愚痴が先に生まれて、まあ、川上弁で言いますと、ぼやきです。もうとにかく、ぼやくことから始まって、一つも向こうへ進展する話がないのです。それが今の現状なのです。田中さんは日本全国回られていますので、他県の林業事情を見てこられて、うちの川上村の林業と比べられて、何か感じられたことをお願いします。



田中

林業が苦しいというのは、本当10年どころか20年、30年前から延々とやっているのではないかなと思うのです。実際、私は全国の林業地を歩いていたら、確かにそう言っているのです。ところが、ここ数年変わってきています。これは、はっきり言っておきますけれども、元気な林業地がどんどん出てきています。具体的に言うと宮崎県や熊本県や鹿児島県、南九州と東北地域です。福島だとか、あの辺りは元気です。本人たちは「いやいやそんなに簡単ではないよ」と厳しいことを言っているのですけれども、活気が違います。実際に、山に行ったら、どんどん木を切って売っています。

なぜ違うのか、元気な地域の木売り方というのは、単純な例ですと、合板用あるいは集成材用の木を売っているのです。これまで合板は外材で造ったわけですが、そこにどんどん国産材が使われ出した。これは、いま世界的な情勢もいろいろあるのですが、そこは抜きにして、国産材でも合板を造ろうというような動きになって造っているのです。だからこれまで「売れない」「売れない」と言っていた間伐材でも、曲がった木でもみんな売れるのです。傷が付いても売れるのです。曲がっても、曲がったまま巻き取ってやるとか、そういう技術が出てきたので、ものすごく元気なのです。

ところが、奈良県はだめなのです。それこそ放談なので、もう言ってしまうかもしれませんが、私はこれまで奈良県の林業関係の団体とか集まりには何度か呼んでいただいて、こういう話をします。そのときに、「いや、苦しい、苦しいと言いますけれども、あそこの林業は元気ですよ。こうやって、いろいろやってきていますよ」と言ったら、みなさん言うのは、「信じられない」「うちは、できない」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」。そればかりです。吉野の人は、何て引込み思案なのだろう。引込み思案というよりは、やる気がないのだと、はっきり言いたいところなのですけれども、それが一番の問題なのではないかなと、いま一番感じています。

先ほど、ぼやきと言いましたが、ぼやきどころではなくて、はっきり言って、投げてしまったのではないかなということ。せっかくこちらはいろいろ新しい提案なり情報を伝えているのに、全然反応しない。この際言わせていただきます。ここには林業関係者ばかりではないので、悪口を言うのも何のですけれども、ほかの地域で、新しい情報を伝えると、みんな結構かぶり付きで聞いてきて、いろいろ食い付いてきて熱心なのです。「そのやり方、では、すぐ視察に行くわ」というような感じになるのですけれども、奈良県で言うと、「そんなん、うちの事とは違う」で終わって、これはだめですね。

辻谷

いきなり結論から行きましたね。(笑)

もちろんよくなる材料があれば、誰も苦労しません。私もよく話を頼まれて、「吉野林業の活路はあるか」と聞かれるのですけれども「そんなん、わかつとったら苦労せ

えへんで」という答えしか、残念ながら、私も持ち合わせがないのです。

田中

では吉野も頑張って、合板用の木を売ればいいではないか、という声は確かにあるのですけれども、一つ言えるのは、それはやはりさすがに私も無理だと、できないことは分かっています。なぜかというと、まず木材の質が全然違う。それを作るまでの価格、コストが違うということです。先ほど言った宮崎の木は仮に元気だというのは、それは作るのも成長が



いいという面もあるし、その後、機械化しているので非常に出すのもお金がかからないという面もあります。ところが、吉野の場合は土倉庄三郎の時代から、銘木づくりを延々とやってきたわけです。ここで銘木というのはどういうものか、むしろ解説していただきたい。吉野の木はほかの普通の木とどう違うのかということなのです。

辻谷

先ほども田中さんは褒めてくれていましたけれども、吉野林業の特徴というのは、「密植、多間伐、長伐期」というのが一つのうたい文句のようになって、土倉さんの時代から来ています。ずっと百何十年続いた森づくりの中には、樽丸づくりというターゲットがあったのです。それに向けて密植して、年輪幅を揃えてという、それで間伐を繰り返してという、いわゆる間伐で収入上げる、皆伐期になった木はもうただになっていたという、そういう林業経営と循環があったのですが、ここへ来て、それが樽丸はもちろん戦後まもなくなくなりました。では、いま何をというターゲットにするものが吉野林業でなくなっているのが事実なのです。それで、他県のように合板とか、そういうようなものをということもありますが、それは量的なものとか生産コストとか、いろいろな因子が重なって、正直言って行き詰まっているというところなのです。

「材は日本一」と誇りにしたらいいと私は思っています。ところが、今はその価値をきちんと見出してくれる人、そういう建築をしてくれる人が、どれだけおられるかなというところなのです。正直言って、吉野材は他県の木材と比べて、大衆向きではないというところと違いますか。

田中

先ほど私のほうの講演でも言いましたけれども、吉野林業というのは、間伐材をいかにうまく商品化して売っていくことだというのがあったのです。最後の残った銘木を売るのもいいですけども、その前に間伐材あるいは端材で、例えば下市でしたら、

神具の三方を、正月のお餅を載せるようなものをつくっています。例えば、化粧箱とか、あと野菜箱とか、あるいは建築足場丸太とか、そういう商品があったのです。

ところが今、それが全部金属アイテムに替わってしまったりとかして、どんどん商品がプラスチックに替わってしまっていますね。でも、これはしょうがないと思うのです。時代の流れで、かつては木で作っていたわけですがけれども、今度はプラスチックのほうが楽だとか便利だとかとなったら、それは変わるのが時代の流れだと思うのです。だから本当は、それが売れなくなったら、すぐに売れるものをつくるべきだったのだけれど、幸か不幸か、当時吉野材と言ったら、ものすごく高価な銘木扱いです。高く売れるものだから、「ああ、そんな周辺商品売れなくてもいいや」ということで、もう放っておいて、建築材で売っておけば十分元が取れるとなって、商品開発を忘れてしまったという面が大きくあるのではないかなというのは思います。端材商品で最後に残っているのは、あるいはまだかろうじて売れているもの、出回っているものは実は「割りばし」だと思うのです。ところが、その割りばしさえも、最近は何か環境破壊の象徴扱いをされて「マイはし」とか言われています。

ここで、ちょっと脱線はしますが、去年、私が割りばしの本を出したのも、そういう思いから書いたのです。あれは、割りばしそのものの話ではなくて、林業全体の話だと思うのです。「割りばしをないがしろにするものは、林業を滅ぼす」という気持ちはあるのです。そういう周辺商品もちゃんと開発をしていかなくてはならないということと、それと別にもう一つ思うのは、やはり最後に残った銘木です。それが売れない。かつて、すごく値段が高かったのが、いまは全然売れない。売ろうと思ったら、普通の並み材扱い以下になってしまう。かつては、「年輪が密で、節がなくて」と言ったら「素晴らしいいい木だな」と言ったのに、最近は私も取材で行って言ったら、「いや、年輪はゆがんでこう広くあるほうが自然だ」「そんな、密に詰まっているのは幾何学模様みたいで嫌だ」「節がなかったら、自然と違う」と、こういう建築主が増えていますね。その中で、では、吉野材はどうするのだということだと思うのです。



辻谷

そうですね。建築のユーザーのニーズは、もう20年前とは全く変わっていることは事実ですね。それに対して、吉野材はブランドもので、ものすごく良質というだけではだめだと思います。それにまつわる、先ほど田中先生が言っておられましたロマンですか。どこで誰がどのような方法でこの山を作ってきたかという思いとか、そういうものに付加価値と一緒に付けないと、ただ「ブランドものでええで。ほんで高いで」という、それではだめで、使ってくれる人にそういう吉野材のずっと歴史とか文化と一緒に付け加えたらと思うのですが、どうですか。

田中

先ほど「では、吉野材も合板にしたら」という感じの話もあったのですが、それでは全然元も取れない。もちろん経済的な問題もありますけれども、やはりもったいないです。本当に、100年かけてつくったものをそういう売り方をしてはいけないということも思います。そういう意味では、いかに吉野が生産する高級材を高く売るかということを考えてはいけませんけれども、では今までみたいに、「吉野だから」と言うのは通用しないです。むしろ、いま「吉野材だから」と言ったら、「そんな高い木は、買わない」というほうに行っています。では何か別の売方をしないといけないと思うのです。いま言われたとおり、何を付けたら、付加価値を付けたら高く売れるかということになると思うのですが、これはやはり、情報だと思うのです。「吉野に木材があるで、無節だからいいだろう」という売り方、殿さま商売はもうだめなのです。この木材はどこで採れた木なのか、誰が植えたのかとか、だれがどうやって育てて、どんな手入れをしたのかとか、もしかしたらその年輪のここが曲がっている部分は何とか台風のあとやでとか、そういう歴史とかがロマンにいくのではないか。それがあったら、高くても買うという人が生まれるのではないかという気はするのです。

もちろん、木を伐ってやるとか、その後の加工とかも非常にまた問題で、今まで10センチ角の材と言いながら実は9.5しかなかったりとか、寸法が結構いい加減だったということも多かったわけですが、そういうことももちろんだめでしょう。それと、いかにきっちりと情報を伝えていくかということだと思うのです。

「ほかの地域の真似をしたらどうだ」というのだけれども、真似できないです。ほかの地域の、例えば宮崎に行っても成長がいいですから直径1メートルの木はあります。だから、60年で、吉野の100年ものの木は育っています。でも、それは誰が植えたとか、どんな世話をしたかという情報はないですし、はっきり行ってドラマはないです。でも、吉野ならあるのではないかなと思うのです。

実際に吉野の山には、例えば誰がという個人の名前はともかくとして、植えた人とか、それまでに育林の歴史とか大体記録に残っているものなのではないでしょうか。

辻谷

そうですね。大体100年ぐらいでしたら、ほとんどの人はみな分かっていてくれると思います。それは簡単だと思うし、そういうふうな付加価値がこれから必要と違うかなという気がします。

もう林業の話ばかりしてますと気が滅入ってしまいますので、ちょっと話題を変えて、環境教育の面にちょっと入っていきたいと思うのですが、今日は村長も副村長もおられますし、何か川上村のPRで恐縮なのですが、実は川上村での最近の取り組みをちょっと紹介したいのです。

根本的なところから言いますと、大迫ダム、大滝ダムという二つの水がめができたことによりまして、村の長期計画「吉野川源流物語」というものの中に、林業の村であることは間違いないですが、「水源地の村づくり」と謳っています。そういうことで「水源地の村づくり」をずっと進めているのです。先ほど田中先生の話にありましたけれども、「樹と水と人の共生」ということもテーマにいろいろと事業を展開しております。その中には観光もあります。観光の目玉となりますと、温泉付きのホテルの杉の湯、五色湯が代表されますが、ほかにも林業資料館とか匠の聚とか、そういった観光の施設もあるのです。中でも一番「水源地の村づくり」の根幹を成すのが、平成8年に『川上宣言』というものを全国に発信したのです。ご存じだと思いますけれども、あの「下流にはきれいな水を流します」という5つの宣言です。それが「水源地の村づくり」の一番の元でした。ただ、その言葉だけではなしに、やはり具現化していかないといけないというところから、田中先生に、この間ご案内しました原生林「水源地の森」の購入、740ヘクタールという膨大な面積ですが、分かりやすく言いますと甲子園球場の150倍くらいの面積です。まずこの森を村は購入をしてくれたのです。それは当時、全国的にマスコミも「小さな村の大きな決断」ということで、非常に反響があったのです。それをやはり管理活用していくということで「森と水の源流



館」が建設されたのです。ここは環境教育などが中心なのですが、普通の博物館と違いまして、もちろん展示物もたくさんありますが、その展示物を見ていただくだけではなく、原生林「水源地の森」と一体化した取り組みをしています。

最近、特に重要視しておりますのは、先ほど先生方からも発表がありましたけれども、やはり森林環境教育です。それに対して、高校、大学、中学、小学、それから一般の方、企業の方からの団体もおみえなのです。そういう森林環境教育の体験プログラムを提供したり、また一方では、「源流人会」という組織を設けて、毎年更新で、現在のところ130人の会員さんがいます。

田中

今日も、そういう方々が多いのではないですか。

辻谷

ええ。何人かご参加いただいていると思うのです。その源流人会は、何か面白い名前なのですけれども、かけがえのないのない水を生む源流の自然を愛し、そして源流を守り育てる人が入会してくれるのが源流人会です。集い、話し、遊び、学び、それで考え、触れ、そしてまたみな交流し、そして参加していただいて喜びを分かち合いながら源流を守り育てていくというのが源流人会の基本的なところですよ。

その中で、いろいろイベントもやっていますし、「源流塾」とか「森づくり」とかも取り組みの中で展開をしています。それをまとめる「源流学」というのを提唱してやっているのです。「学」というと難しいようですが、難しいことではないのです。

これを理念にもって源流会の活動もしているのです。自然の森とか水の恵みを未来の子供たちに手渡していきたい、そんな思いから「源流学」の取り組みを始めたのです。「源流学」を一言で言いましたら、「源流を通して人と自然の役割について考え、そして行動して、その体験の中から一人ひとりが答えを見出していく」というのが取り組みなのです。

具体的に申し上げますと、「現代社会が失ってしまったものとか、また見失ってしまいそうなものを源流地域で学ぼう」というところなのです。例えば、山村でのいろいろな、かつての生き方、今はもう生活様式が変わりましたが、昔の田舎の生き方、古い人たちの知恵とか技を遊びの中で、自然の大切さを知ろうということが「源流学」の進めようとするところなのです。テレビとかネットではなかなか会得ができませんので、「百聞は一見にしかず」で、森に来ていただいたら、一番理解ができると思います。

本物の自然を体感しに来ていただきたいと、源流館としてはそういう活動しているのです。その参加者の声を一つだけ紹介します。これは檜原市の40歳の男性の人です。ちょっと読ませてもらいますと、「大地震が起こって、ライフラインが寸断されたり家を失ったりしたら、大抵の人たちはどうやって生活したらいいか分からなくなって困ってしまうと思います。でも、森さえあればそれに頼って生きていける。シカやウサ

ぎ、鳥などを捕って食料にすることができる。木の実やキノコも採れるでしょう。川には魚もいるでしょうし、家を建てるための材木や燃料のための薪も手に入る。衣類や道具も作ることができるでしょう。でも、それらを工夫し利用できる技術と知恵を持っていかないとだめです。生きる力を楽しみながら吸収していきたいですね。私は、自然を守ろうなどと大きなことは思っていません。ただ、自然と調和するように心掛けていきたいですね」こんなご意見をいただきながら、進めています。

田中

ちょっと話を戻してしまいますけれども、私が初めて川上村を訪れたのは20年前の「ホテル杉の湯」のオープンときでありますけれども、まさにあのとき、川上村は、林業から観光へ舵を切った時期なのではないか。もちろん実際はダムをつくったからという面はあったのでしょうけれども、そのときに舵を切ったところだと思うのです。事実「ホテル杉の湯」という、当時としては珍しい山村の豪華ホテルができて、さらに次々と「トントン工作館」などができてきて、これ自体は結構なことで、私もいろいろ楽しませてもらっている部分はあるのですけれども、いわゆるハード、言葉は今風にいう箱ものですね。箱ものを作るだけでは、1回行ったら飽きてしまうのです。はっきり言って、源流館も私は1回行って、全部見て、次は別に見ようと思いませんよ。でも、2度目に行こうと思うのは何かというと、そこで何をやっているかというソフトの部分なのです。ハードは1回見たら終わってしまいますけれども、ソフトはリピーターを呼ぶわけです。「ああ、あのとき、楽しかった。イベントがあったら、じゃあ、もう1回」という気持ちになるし、また「あの時、面白い人と知り合ったからもう1度会いたい」とか思うわけです。それがないと、観光産業自体も成り立たないし、そもそも地域づくりにならないではないですか。単に、箱もので通り過ぎてしまうだけではないかと思います。

全国に実際、あちらこちらで、村おこし、地域づくりをやっていますけれども、箱ものに頼られると1回で終わってしまうのです。だから、最初の年は黒字で翌年から赤字という施設がいっぱいあります。ただ、私は別に川上村の財政状態を知りませんが当時のすごく満員だったと思うのです。もう、だんだん古くなってきたらだめだと、そうしたらライバルのほかのホテルが出てきてしまうとなったら、そのままだとハードだけだとだめになってしまうのですけれども、そこにもし、その人たちのもてなしが楽しかったら、またもう一度行こうと思います。

源流館も、同じだと思うのです。あそこの巨大な映像を1回見ましたが、あれだけではだめで、辻谷さんが面白かったら、もう1回会いたいと思う。そういうソフトがまさに「源流人会」なり、その他いろいろな試みの一つなのではないかなと思うのです。

田中

それから、ちょっと言い忘れました。辻谷さん、私を「先生」と呼ばないでください。師匠から、「先生」と呼ばれたら私は何と呼ばばいいか困ってしまいますので。

辻谷

はい。(笑)



田中

どうでしょう。このソフトとしての「源流人会」というのは、リピーターはかなりの多いのですか。

辻谷

そうですね。ええ。それともう一つ、エコツアーと言いますか、それで「達っちゃんクラブ」というものもやっています。これもこの背景には、やはり昔は林業を通してきれいな水とか山、自然を守ってきた、そういう中で、過疎化がだんだん進んでいって森や水を守るのが非常に難しい時代になってきた。これは、川上村だけの問題ではないと思うのですが、そんな現状をやはり都会の人に知ってもらい、理解と協力をしてもらうために、山村と都市との交流が必要だということから山で遊び、学ぶということをテーマに「達っちゃんクラブ」を始めたのです。

それで、おかげさまで11年になりますけれども、参加者をずっと維持していただき、実はこの先週の土曜日にそうめん流しをしたのです。そのとき300人の申し込みをいただいて、とても対応できませんので、そのうちの150人だけ抽選で連絡したのです。当日にキャンセルがありまして、トータルで130人ぐらいになりました。

田中

あの日は、雨でしたね。

辻谷

前の日の夜から朝まで雨で、ところが幸い雨が上がって。

田中

いやいや、朝から雨が降っていてキャンセルが20人ぐらいで済んだというのはけっこう奇跡的な話で、普通ならあきらめるのがあると思うのです。またイベントのほうもそれで中止しなかったわけですね。

辻谷

ええ。もちろん、きっちりやりました。それと夏休みということで家族連れが多く、子どもさんが半分くらい来てくれました。びっくりすることに、そうめん340束、17kgです。あれを食べていただいた。実は昨日ですが、五條市の女性の方からその

ときの感想としてメールをいただいたので、それもちょうと紹介したいのです。

「おはようございます。先日はありがとうございました。お腹いっぱいいただきました。想像していた以上に感激しました。子どもも、大喜びでした。スタッフの方々は、あんなにたくさんの準備、大変だったと思います。次回、応募があれば準備から参加したいです。本当に、お疲れ様でした。ありがとうございました。

子供は、達っちゃんやスタッフの方の中で、おじいちゃん、お孫さんを連れて来られた方の後ろばかり付いていました。というのは、先月、おじいちゃん、私の父が山から滑落し亡くなってしまいました。きっと、子どもはスタッフの方々がおじいちゃんのように思えたのでしょう。魚が捕れたら、「見せてくる」と言って走っていました。学習面では、草花のことなどいろいろ教えてもらって喜んでいました。

先月、子どもと私は、おじいちゃんが好きだった山、川を大切にしたい、自然に触れていたいという思いで源流人会にも入りました。達っちゃんクラブにどんどん応募したいと思います。これから、どんどん川上村にお邪魔しますのでよろしくお願いします。久しぶりに、楽しそうに心の底から笑っている子どもを見たような気がします。これも、皆さんのおかげです。ありがとうございました。また、皆様によろしく。お会いしに行きます」という、このようなメールをいただきました。こんなものをいただくと、非常にやりがいがありますね。



田中

感動的なメールなのですけれども。本当にいま聞いていて思ったのですけれども、ではその子どもたちが喜んだのは、何も雨の中、流しそうめんを食べられたから喜んでるのではないと思うのです。実際、最終的に雨が降ったかどうか知らないですけれども、雨の中でもちゃんとやろうと、流しそうめんをするような準備をされたわけですね。

辻谷

そうですね。

田中

もちろん準備のテクニックもありますけれども、そういうスタッフの思いがあって、単にイベントをやって、「流しそうめん、食べられるで」「それは、おいしかった」だけで終わるのではなく、むしろそのときの一生懸命用意したスタッフのみなさんとの交流とか、思いが伝わって初めて「次も行きたい」とか、「また、参加します」という話につながると思うのです。そういう人の営みとのつながりを抜きに、この流しそう

めんも言ってみればハードなので、そのハードだけではやはりだめだと思うのですね。それを運営する人々の気持ちが伝わって、初めてハードが実を結ぶと言いますか、意味があるので、その雨の中をどうやって流しそうめんを食べられるように準備したかとか、そこの部分を抜きにしては成り立たないのではないかなという気はします。

辻谷

そうですね。私は常々言っていますけれども、物よりも人ですね。人が一番大事だと思います。

田中

ちょっと、森から話が外れてしまっていますけれども、流しそうめんだけではなくて、森の中を歩くとかというのも、単に歩いたって楽しいわけではないと思うのです。そういうものが好きな人もいるでしょうけれども、虫ばかりが出て、ヒルにも食べ付かれて楽しいかという、全員が全員、それを楽しいと思わないと思うのです。やはり、そこで「この木は、何だ」とか、「ヒルだって、こうやって生きているんだ」という説明を受けて初めて、ちょっと感動を呼ぶ。そういうソフトの部分を抜きには、成り立たないのではないかなというふうには思っております。

森を歩く話になったのでちょっと触れますと、最近森林療法というのが広まっています。森林セラピーという言い方もしますけれども、これまでは単に森の中を歩こうというのは、森林浴とか森林散策だと言ったのですけれども、もうちょっと科学的にその内容を生かして、なぜ森の中を歩いたら気持ちがいいのかということ进行调查しているのです。そして結構効果が出ていまして、実際うつになった方とか、ノイローゼとか、まあ会社でストレスを受けているとかという方が、森林散策を続けるうちに回復するというケースがいっぱい出ております。さらに、本当に医学的な研究になりますけれども、NK細胞と言うのですけれども、ナチュラルキラー細胞というのが免疫性の細胞なのですけれどもこれが増加するということが分かってきています。森の中は、免疫性細胞が増加しまして、その中で抗がん機能を持ったたんぱく質がどんどん出るのです。がんに効くというような、医学的にちゃんとした有意性のある研究も出ております。

ほかにもストレスホルモンのコルチゾールというものがあるのです。それを調べてみたら、明らかに歩く前と歩いた後というのは減っている。アルファ波も発生しているという結果も出ています。医学的にも、森林散策すると体にも、また精神的な癒やしになるというのがそろそろ分かってきているのです。

これを知らずに、単に「森を歩け」と言われたら、むしろストレスがたまってヒルに吸われて終わってしまうところなのです。それをちゃんと誘導する方がいて、初めて成り立つのではないかなと思うのです。

辻谷

この間も、音楽療法士という資格があつて、うちの村の村民大会にも講師の先生をお招きしてゲストに来てくれたのです。私は勝手にですが、「森林療法士」だと自負しているのです。まだ国にはそういう資格制度はないみたいですが、私はもうそう思っているいろいろな参加してくれる人に言います。心理的な面と生理的な面のアドバイスをしたりもしています。



田中

どうやら国が、森林セラピストという資格を作ろうとしているみたいなのです。そんなものを取って、お金を払うのは無駄だと私は思っているのですが。もちろん基礎的なテクニックがあるにしても、そういう試験を受けて取るものではなく、森林療法というのは、やはり森とかかわりを持って本当に誘導できるかどうかという経験が重要で、そこを軽視してはだめだと思います。言葉は悪いですが、森林インストラクターの資格を取ったら、森のこと何でもしゃべれるかと言ったら、全くそうではないことは、辻谷さんが一番よく知ってらっしゃる。言っているいいですね。

辻谷

どうぞ言ってください。

田中

辻谷さんは、森林インストラクターの試験で落ちているのです。(笑)でも、その後、試験に通ったインストラクターを教えているのです。資格というのはそんなものだと思います。やはり、実地で歩いたり、森の中で暮らして、初めて会得するものではないかなと思うのです。

都会では、もちろん資格を取って励みになるとか、そのために森に通うようになるということはいいいことだと思いますけれども、資格を持ったら、すぐ森林療法ができるかと言ったらそうではない。そのことをある意味広げていけば、言ってみれば村民みんなが森林療法士になれるというぐらいの気持ちを持ってもいいのではないかなと思っています。

辻谷

そういうことで常々、私は『山は病院だ』とも言います。子どもの頃から健康を維持してくれたというのは、私はあくまでも山だと思っているのです。「山は病院である。木はお医者さんである」ということで、山に山小屋をつくって患者がそこを利用する。いわゆる入院ですね。そんなことをして、心理的なリラックスを図っていくということもしたらどうかと思っています。それも一つ的环境教育と林業の一端であるのでは

ないかという気がしているのです。

田中

もちろん、その森林療法的なことをやって、経済的に回るということの可能性もありますから、それも一つの林業だと思います。むしろ、そういうことで、仮に吉野を非常に親しく感じる、あるいは気に入って毎週通うようになってきたら、今度、自分の家を建てようと思ったときに、それは絶対吉野の木を使いましょうよと思いますね。

結局、回り回って、まさに木材としての林業にもつながってくることだと思うのです。単に「吉野材は美しいで」、「年輪密やで」というのを売り込むのが林業ではなくて、吉野でやる。川上村と非常に親しくなる。あそこの山の人を知っている。知っているから、今度、木材使うときになったらやはりあそこの山の木を使いたい。自分の家だったら、その家のこの柱はあそこの山にあったのだなということを思うだけで、だんだん近くなる。そういうものではないかなと思う。

「この木は、実はボルネオのどこそこの山から採ってきた木やで」とか、「シベリアの森林を切り開いた木やで」とかと思っても、全然ドラマにならないではないですから。でも、あそこの山の達っちゃんの顔を浮かべながら、「ああ、この木やな」というのは、やはり家にも愛着ができるのではないかな。

もちろん、森林療法という意味での新しい林業もあるのですけれども、すべてはつながっていて、ここからここは林業で、ここは森林療法だというではなしに、全部つながっているものではないかなと思うのです。

せつかく、「山は病院だった」という名せりふが出たのですから、ぜひ『山が学校だった』の続編を書いてほしいなと思うのです。

辻谷

できたら、そうしたいですね。本当に私は、人生を振り返って、山がいろいろ教えてくれたと思うのです。もちろん病院だったし、山というのはまた一面、私にとっては大きな母の懷であったと、人生を振り返って思うのです。いろいろな山の恵みで生きてこられた。

特に、経験ない方もおられるか分かりませんが、戦中戦後の食糧難時代に、川上村は田んぼがありませんので米一つもできません。その時代をずっと生き抜いてこられたというのは、やはり自然、山の恵みがあつたればこそですね。それがなかったら、おそらく餓死していると思います。

今でも、本当にそういう点で、木は医者であり、木の実や樹皮など薬ですね。そして、山の水は名水であり、薬の水である。そういうふうに、私は自身を振り返って思っているのです。

それと、一番大事な山の神様を今でも祭っていますけれども、やはり山の神を崇拝して、山に対する畏敬の念というのを絶えず、昔から今でも、私はずっと持ち続けております。そういうことも、林業とか自然の環境とかを伝えるのに、結びつけていき

たいなというふうに考えています。

田中



実際いま言われた一種の山村の文化ですね、これは単に伝統的なものだから残せということとは違うと思うのです。そんなものだったら、単に博物館に報告書を作って放り込んでおけばいいことになってしまうので、そうではなくて、もっと今の生きるものにつながる文化というか、ここを伝承していかないといけないと思うのです。

これは山村と言うか、悪いですが

田舎と言ってもいいですけども、よく田舎ツアーというのがありまして、例えばカブトムシをとるツアーとか、あるいは雪かきツアーがあるわけです。ところが、それを企画したら、田舎の方は「何で、そんなもん人に来るか分からない」と言うのです。でも、都会の人は求めているのです。それをやりたい。お金を払ってでもしたいという方がいるのに、山村の方は、「え？ 何が楽しいの」となってしまうのですけれども、ちょっとそこは認識を改めて、みんな、これを求めているし、もしかしたら、いま言ったとおり、こういった技術が生き残りにかかっているかもしれないのです。大地震かどうかは別として、何らかの饑餓が襲ったときに、山の技術を持っていることが実は自分が生き残れるかもしれない、そこにもつながっていると思うのです。生き残りをかけて、この山村文化を伝承する、習うということが必要になってくるのではないかと思います。

残念ながら、いま山村では果たして、達っちゃんほどの技術を持った人が次の世代が育っているかどうかは心許ないのですけれども、生きた文化として、文化と言っても、大げさな歌舞伎や能だというような文化ではなくて、まさに日常生活のその土地と結びついたものが一つの文化になってくるのではないかな。それは、ぜひ失わずに伝承していただきたいなと思っています。

田中

地域に求められるものは何かということなのですけども、地域と言いますか、それぞれ、例えば田舎と都会では、都会にモノがいっぱいあって、文化もいっぱいあって、お金もあって、全部あって、山村にはそれがなくて、だから山村は弱いですから助けてくださいというような声が、実は山村の方からも上がっていると思うのです。それは、やはりちょっと違うのではないかな。お上に助けてもらおうという発想がやはり、今の山村文化を弱めているのではないかなと思うのですね。

探せば本当にいっぱい豊かな、「びっくり箱」と書きましたけれども、学びだけでは

なくて、生きるための知恵なり、資源がいっぱいあるわけです。それをうまく外部へ発信してもらいたいという気持ちがあります。

それが、もちろんその地域の方々が生き残るすべでもあるのですけれども、同時にその山村文化なり、その知恵に触れる都会の人にとっては、その魅力に触れる喜びというのがあるのではないかと思います。結局これを発信することは、山村の人も助けるけれども、実は都会の人も助ける。これは、もう本当に双方向的なものであって、決して片方だけがいいものがあって、後はやらずぼったくりだということではないのだと思います。そういう魅力を発信する。それを受容するという過程こそが、環境教育ではないかなと思っております。

辻谷

最後にちょっとせっかく環境の話が出ましたので、私は、山というか林業は、木材生産だけと違うと思うのです。今やかましく言われています、いわゆる木材物質資源よりも、むしろいま環境資源に目を向けられていますし、目を向けるべきだと思うのです。今まで、水やら、空気やら、木や花はみな、ただではないかという話で来ていましたけれども、そうではなくて、林野庁が平成12年かに、いろいろ森林の公益的機能で75兆円という数字を出しました。それからいろいろ見ていると、おそらく日本の国民が日本の森林から受けるそういう恩恵が100兆円を超えているのではないかなという気がします。ただ目には見えませんし、誰もそんな勘定はしていませんが、林野庁はそんなふうにはじき出しています。そういうことから、やはりCO₂の削減問題からいろいろ含めて、環境資源をもっと重要視していかないといけないと思うのです。

単純な勘定になって申し訳ないのですけれども、日本の森林から見たら、ヘクタールあたり単純計算したところ、大体ヘクタールあたり400万円ぐらい年間の公益機能の恵みを受けているということです。川上村も参考にしてみたのですけれども、全体で1000億円、川上村の山で、川上村の村民が受けるという公益的なところが、1000億円という単純計算です。村民2000人として、1年間にお金を出して買ったら5000万円の森林からの支援をただでいただいているという解釈です。いま奈良県が1人500円の環境税をとっています。川上村にすると200万円ぐらいだと思うのですけれども、そんな数字的を見ましても、これからそういう勉強もやはりしていただいて、そのためには、我々は自然に対して、森林に対して何をなすべきかを、木材生産もしかりだけれども、こんなことを言ったら川上の林業課におしかりを受けるかと思いますが、やはり百パーセント木材生産に依存せずに、ほかの何か副収入源というのですか、そういうようなことも考えていく時期に来ているのではないかなという気がします。

田中

金額が正しいかどうかというのは置いておきますけれども、環境も、もちろん木材としての資源も大切です、これははっきり言って線引きすると混乱してしまうのではないかと思います。これは環境のためになるからお金を払うとか、木材として価値があるか、ないかということになるのですけれども、これはすべてつながっていき、しかも森林と人間社会は切れているかと言えば、そうでなくて、つながっているのです。山村はまさに、つながっている地域ですね。山村と都会もつながっているのだと思います。つまり、仮に川上村が減ぶということは、これは日本列島全体が減ぶという一つのシグナルだと思います。どうしても、ここは山村だけの問題で、限界集落が一つ消えたから、別に都会としては何の影響もないという発想になってしまうのですけれども、実はそれは大きな日本の流れの中で、最初に何か異変が起きたときに、それが一番シグナルとして、やはり周辺部分の弱い部分に出るわけです。それが実は、山村部分にふれているのではないかなと思います。だから、ここに今日来てらっしゃる方は都会の方か、山村の方かはちょっと分かりませんが、これは一つの山村の問題ではなくて、日本という一つの国の中で、ある地域が減ぶときとか、自分たちにもその影響は与えるのだ。もっと言えば、日本が傾けば、地球上の国際社会が傾くのだというぐらいのつながりを感じていただかないと、結局「あそこの村は弱っているから、ちょっと税金で支えてあげろ」そんな傲慢な国の発想になってしまうのでは、結局は支えられなくなってしまう。そして、最後は「いまや国は金がないから、切り捨ててしまえ」ということになってしまいかねない。それだと、結果的には、最後に気がついたときには、そのつけは全部自分に回ってくる。都会のほうに回ってくるのだというぐらいの覚悟を持って臨んでもらいたいなと思っております。



司会

話が佳境に入ってきました、ここでストップをかけるのは非常にもったいない気もするのですが、ちょっと時間の事情もございますので、最後にお二人に一言ずつ、本当の締めということで、会場に皆さんにメッセージを含めてお願いしたいと思います。

田中

私からですか。何にしようかな。ぜひ、辻谷さんには、『山は学校だった』の続編の『山は病院だった』を書いていただいて、それを売っていきたいなと、皆さんには、ぜひ買っていただきたいなと思っております。

決して、今日ここに来ている方というのは、もともと森林とか好きな方とは思っているので、釈迦に説法のようなものになりますけれども、自分とは違う部分の非日常だと思わないで、ぜひ日常の中に森を取り込んでいただければと思っています。

辻谷

何かこう環境と林業に結ぶような、これからまた、まだいろいろ摸索したら出てくると思いますので、特に次の世代を担ってくれる子どもたちに、今しっかりと環境を理解して、勉強していただきたいというふうに思っていますので、その辺に全力を尽くしていきたいと思います。どうぞみなさんのご協力をよろしくお願いします。ご清聴、ありがとうございました。

司会

どうもありがとうございました。ではお席にお戻りください。みなさま、もう一度暖かい拍手をお願いします。

実は、お二人のマイクのボリューム調節が共通のもので、辻谷館長は非常に声が大きいので、調整をするのに苦勞をしておりました。そのように山で働く人はみな、声も大きく、体も大きく、そして人が大きなあと常を感じています。森と人をつなぐという中で、達っちゃん（館長）のような人がいてくれたり、山や森で働くたくさんの人がいてくれたり、田中さんのように、森というものを研究されて社会に伝えてくれるような人もおられます。川上村へ来ると、森と人をつないでくれる、たくさんの方がいます。森と水の源流館には森の案内人もいます。とにかく森へきていただければ、また何か新しいものが、みなさんに見えてくるのではないのでしょうか。わたくしどもは決して森林環境教育を提供しているというふうには思っておりません。なにかひとつ、お手伝いというか、そのようなヒントをいっしょに見つけていくことができればいいなあという気持ちで思っておりますので、ぜひ一度、川上村へ、森と水の源流館へお越しいただければと思います。

おわりに

川上村副村長

財団法人 吉野川紀の川源流物語 副理事長

栗山 忠昭



本日は、みなさま長時間、ほんとうに熱心にお聴きいただき、ありがとうございました。川上村に興味を持っていただいているのか、山村を憂いておられるのかはわかりませんが、こんなに多くの方々にお越しただけましたことを心からお礼申しあげます。

田中先生には、吉野林業の歴史と重みを語っていただき、最後にはちょっぴり厳しいご指摘もいただきました。真摯に受け止めなければいけないと思いました。ありがとうございました。

そして白樫北小学校の山本先生には、校舎を離れて川上村で勉強していただけたことは、非常にありがたかったですし、その貴重な発表会を参観日に行われたことはうれしいです。お父さんやお母さん方にも広めていただけるということはうれしいことと思いました。また和歌山市の市川先生は、平素から川上の魅力をPRいただいております、ありがとうございます。今後はぜひ和歌山市での「川上村の出張所」の看板をお付けいただければありがたいと思います。(笑) ほんとうにありがとうございました。

そのあとの、田中先生と館長の放談では、やはり人と人ということにつきますと思います。人と人の出会い、つながり、顔をみて話す、それによって地域が見えてきたり、文化を考えてみたり、産業を語ってみたりすることになっていくのではないかと、つくづく感じました。本当は「田舎を助けてほしい」「山村は今大変だ」ということを今日もお願いをしたかったのですが、田中先生のお話に、それを言うてはだめだということがありましたので、今日はそれは封印しますが、そのかわりに、みなさんとの本日のこの出会いを、これからさらに深めて、長く続けていきたいと思います。村も一生懸命生きますから、ぜひ興味を持っていただきたいと思います。よろしくお願いします。

最後になりますが、本日もボランティアでお手伝いをいただきましたNPO法人 21世紀フォーラムのみなさまには、いつも応援をいただきありがとうございます。大滝ダム学べる建設ステーションのスタッフの方にもお手伝いをいただきました。そのほか本日のご後援、ご協力をいただいた団体の方にも感謝を申し上げます。

みなさま、本日は長時間ありがとうございました。

企画書から

今回のシンポジウムのねらい

昨年と同時期、同じ会場において、故前登志夫先生を講師にお迎えし、このシンポジウムを開催しました。今年も同じ目的のもとに開催いたします。少しでも多くの人々に参加していただけるよう、交通アクセスの便利な橿原市内を会場とし、森と水の源流館の休館日である水曜日を選んで、スタッフ、関係者一同、川上村を飛び出します。

社会が都市生活中心のスピードとなっていく中で、忘れ去られてしまいそうな、自然、暮らし、産業、そこに培われた技や知恵などが、源流部にはたくさん埋もれています。それらを豊富な知識や経験、優れた表現の術をもつ講師独自の視点から掘り起こしていただき、発信していくことを第一のねらいとしています。

平成 18 年度から奈良県では森林環境税が導入され、その税収の一部が森林環境教育の促進に利用されています。この動きを受けて森と水の源流館でも、それまで以上に学校教育機関からの利用件数が増加しました。「川上村らしい森林環境教育とは何か」当館でも試行錯誤を繰り返しながらプログラムを提供しています。しかしもっと苦勞をされているのが現場の先生方であることがわかってきました。「まちなかの学校で森林といわれても・・・」と頭を抱えることも多いとのこと。そこで小学校の先生をはじめとした森林環境教育にかかわる教育関係者はもちろん、林政関係者や林業従事者、地域観光事業者などがとともに問題を共有できる機会を設けたいと考えたのもこのシンポジウム企画の発端でした。

川上村は吉野川(紀の川)の水源地の村。源流部に保全する手つかずの原生林と、吉野林業発祥の地として脈々と施業をしてきた人工林、これら他地域にまさる森林資源の価値と魅力を知るとともに、それらを「森林環境教育」という観点で、どのようにいかすことができるか、地域に求められることは何かについて考えてみたいと思います。

森と水の源流館

樹と水と人の共生を目指し、「水源地の村づくり」を行なう川上村の取り組みの象徴のひとつとして 2002 年開館。村が購入・保全する吉野川(紀の川)源流部に残る約 740ha の原生林「水源地の森」の自然や、源流部の山村での暮らしをテーマとした展示や映像に併せ、フィールドプログラムによって、情報発信、体感、体験を提供しています。近年特に「森林環境学習」支援へのニーズの高まりを受け、小学校から大学、企業に向けて、原生林や人工林に足を運び、その比較を通じて、森の役割や大切さを感じてもらっています。学校の教室に出かけての「出張源流教室」も多く利用いただいています。これらの展開の礎となるものは、村が提唱する『川上宣言』であり、源流部に残る「自然」「歴史・文化」「ひと」から、生きる力を学ぼうとする『源流学』にあります。

企画・運営、司会 / 森と水の源流館 財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局次長 尾上 忠大



〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平
TEL 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388
<http://www.genryuu.or.jp>